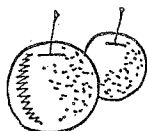


くにたちブッククラブ

記憶の欠片をひろい集めて



2024. 4 国立市公民館



<くにたちブッククラブ> 記憶の欠片をひろい集めて



この講座では、作品を読んで意見や感想を出しあい、参加者や講師の話聞いて、「読み」を深めます。自分とは違う考え方や背景をもった人の意見や感想はとても新鮮で、新たな視点を発見することができるでしょう。今年度のブッククラブでは、「何の意味もないように見えていても、必要な出来事である(あった)」というありきたりな物語にはおさまらない、解釈をすり抜けてしまうような作品を読んでいます。ただそこにある(あった)出来事の欠片をひろい集めることで、見えてくる風景とは。一人ひとりに違った景色が見えてくる、読書を通してそんな体験がきっとできるはずです。

1 ／ 18 (木)	12 ／ 14 (木)	11 ／ 9 (木)	10 ／ 12 (木)	9 ／ 21 (木)	7 ／ 13 (木)	6 ／ 8 (木)	5 ／ 11 (木)	月 日
小川 洋子 『約束された移動』 (河出文庫)	安部 公房 『箱男』 (新潮文庫)	今村 夏子 『むらさきのスカートの女』 (朝日文庫)	村上 春樹 『女のいない男たち』 (文春文庫)	川 越 宗 一 『熱源』 (文春文庫)	佐藤 泰志 『きみの鳥はうたえる』 (河出文庫)	山田 詠美 『ファーストクラッシュ』 (文春文庫)	藤野 可織 『ドレス』 (河出文庫)	作 品
おだいら 小 平 麻衣子 (慶應義塾大学・日本近代文学)	大 野 亮 司 (亜細亜大学・日本近代文学)	佐 藤 泉 (青山学院大学・日本近代文学)	深 津 謙 一 郎 (共立女子大学・日本近代文学)	内 藤 千 珠 子 (大妻女子大学・近現代日本語文学)	大 木 志 門 (東海大学・日本近代文学)	榎 本 正 樹 (文芸評論家・現代日本文学)	山 岸 郁 子 (日本大学・日本近代文学)	講 師

もくじ

【講義録】小川洋子『約束された移動』――楽しいばかりとは言えない人生を祝福する・講師	小平麻衣子	4
『ドレス』藤野可織 分かりあえなさを描いた不穏の世界	大井利雄	15
『ドレス』（藤野可織）――シニールな一発ギャグ	中井あつし	20
『ファースト クラッシュ』を読む――三姉妹三様の恋の身体感覚――	関美智子	25
きみの鳥はうたえる（また新しい読み方を知る）	中島三恵子	30
『熱源』川越宗一「文明」の理不尽さと熱く闘う樺太アイヌの人	大井利雄	33
『熱源』を読んで 国家に翻弄されながら生き抜いた人々の物語	岡野正義	41
ドライブマイカーを読んでみて	岩井としえ	45
『むらさきのスカートの女』――「わたし」の承認欲求から生まれた可笑しくも哀しい作り話――	東健太郎	48
降り注ぐ悲しみの中で――今村夏子『むらさきのスカートの女』を読む――	津田仁	51
じわる『むらさきのスカートの女』（今村夏子）	中井あつし	56
選評から見た今村夏子ワールド――『むらさきのスカートの女』を巡って――	矢野勝巳	60
不思議な非現実の世界 安部公房『箱男』	岡本修治	64
安部公房著『箱男』を読む――仕掛けられた迷路への旅――	関美智子	69
『約束された移動』――名も無い人に光を当てる――	東健太郎	74

日の当たらない人たちへの優しい眼差し 小川洋子 『約束された移動』	79
『子供が子供でなくなるとき』―『約束された移動』感想記―	82
武蔵野文学散歩く早稲田から市ヶ谷へく	87
くにたちブッククラブ文学散歩2023 早稲田、神楽坂を巡るに参加して	89
くブッククラブからく「図書室月報」再録く	
藤野可織『ドレス』	90
山田詠美『ファーストクラッシュ』	91
佐藤泰志『きみの鳥はうたえる』	92
川越宗一『熱源』	93
村上春樹『女のいない男たち』	94
今村夏子『むらさきのスカート』の女』	95
安部公房『箱男』	96
小川洋子『約束された移動』	97
2023年度を振り返って	98
あとがき	99

【講義録】

小川洋子『約束された移動』

―楽しいばかりとは言えない人生を祝福する

講師 小平 麻衣子

今回は、短編集です。全体の特色として、人には知られないけれども、重要な仕事をしている人々がいくつもの作品で描かれていました。仕事と言いましたけれども、エスカレーターの補助とか、デパートの迷子係とか、本当にあるのかわからないような仕事だけれど、金銭に換算できない、ケアのような行為ですね。自分をそんなふうに全面的に支えてくれる人がいたら、夢のようです。そして、全体を通じての大きなテーマとして、喪失、移動、翻訳があると思います。これらについてお話しすることを予告しておきましょう。

小川洋子さんの作品は、不在や、すでに失われてしまったものを描くことが多いと思います。失われてしまったことを意識することによって、あるいは隣接するへ在るものゝが不在の輪郭を浮かび上がらせることによって、失われたものの重要性や、存在することの孤独がより浮かび上がってきます。今回の『約束された移動』に含まれる短編には、いずれも多かれ少なかれ、このテーマが含まれています。

1. 読むことと創作

まず表題作「約束された移動」についてお話ししましょう。この小説では、ホテルの客室係である「私」にとつて、宿泊する有名俳優Bに会うことは決してなく、彼は常に痕跡としてしか現れていません。客室に残された髪の毛や気配……、そしてあるとき、客室にぎつしり備えられている本棚からBが本を持ち去っていることを発見し、それがなんの本であるか突き止めようとしています。時折しか訪れないBですが、そのたびに持ち去る本は、移動に関連する小説ばかりだとわかってきます。「私」は、失われた本を自分で手に入れ、読んでいきます。

「私」は、本を通してBと対話するわけですが、「私」以外から見れば、それは対話したような気になっているだけともいえます。これはBという人に対する解釈であり、ひとつの翻訳ですよね。解釈し、語ることによって、B本人は不在なのにもかかわらず、読者には、より濃いBが立ち現れてきます。

Bはたいへん美貌の俳優でしたが、すでに最盛期を過ぎ、さまざまな環境によって、ずさんでいるようです。「私」は、Bについてはデビュー作が好きでくりかえし

見ているといいます。その若さも美貌もいずれ失われることがわかっていて、映像に幻のように存在するのみです。小説ではここでBのデビュー作の情景が描かれるわけですが、象徴的な描写として本文をみてみましょう。文庫本の10ページから11ページにかけてです。

作中の「弟」を演じ、なりきっているB、これも一つの解釈や翻訳といえますが、そのBが演じるキャラクターが河岸を歩いていきます。カメラは「ゆつくりと回り込んで横顔をとらえる」。ここは、読者の頭の中にも、映画のカメラワークが浮かんできます。それから、彼は、祖母から過去に聞いた象の移動の話をつぶやいていきます。「……昔々、この町で万国博覧会が開かれた時、」象達が行進し、途中で赤ちゃんが生まれる。「大行進を祝福するのに、これ以上の出来事があるだろうか。おばあちゃんには思いつかないよ。ああ、これはあらかじめ約束された移動なのだ、と誰もが深く領いて、生まれたばかりのその生きものに祈りを捧げた」。

ここを読むとき、私たちの心の中には、想像したおばあさんの声が響いていないでしょうか。もしこれが本当の映画だったら、と考えてみてください。キャラクター

がつぶやいているとき、その声はBのものとして現れているはずで、小説の言葉は、映画のカメラワークや音声を再現しているわけではなく、小説ならではの効果を発生させます。

そして、子どものころから、彼はつらくなくなった時には祖母の話をつぶやきながら、象が移動したのと同じ道を歩いてきました。「河原に目を凝らしているうち、彼ら（象のこと・小平注）の足跡が目映る気がしてくる」という表現がありますが、「気がしてくる」のは誰でしょうか。Bが演じている青年が？ 足跡はそこにありませんし、セリフもなくて「気がしている」だけならカメラは描写できないはずですから、これは映画が写した青年の心中ではなく、「私」による想像でしょう。しかも、つらい人生を送っているBその人の人生、しかしメディアで知られるのは一部で、想像されるしかない人生も重ね合わされているようです。このように、見たり読んだりする人が対象の人物に溶け込んでしまう体験が埋め込まれた小説なのだと思います。

「私」は映画の内容を語っている、つまり引用しているようではありますが、Bの心の中の思いも、言葉

としては発されていないはずで、映画を繰り返し見たり、痕跡を知り尽くしている「私」による想像にすぎないといえます。引用は、虚構を作り出すことと紙一重です。ここには、小川洋子さんが考える、読むことの樂園、理想的な読書が現れているのではないのでしょうか。そもそのホテルの部屋が、読みたい本がいくらでも詰まっているありえない客室なのですが、読書は創造的な行為であり、もとの創作と、それを再話することによって作り出されたものが溶け合って一体になっています。

作家というのはオリジナリティで評価されますので、一般的には他の人の作品を引用したりはしないものです。しかし、この作品は引用をかくさず、引用する人が、引用もとに持つ特別な感情や、引用することで生じる特別な世界を示しているように思います。小川洋子さんは、読書のプロでもあって、読書案内のような書籍を何冊も出しているのもみなさんご存じかと思いますが、作中で「私」が本を読むだけでなく、外側の読者である私たちも、同様に創造的な読書体験にいたるわれていると見るべきでしょう。私なりの読みかえが、連想によってつながれていくのです。

2. 〈移動〉という問題系

さて、引用されている作品は、どれも移動がでてくる物語です。『無垢なエレンデイルと無情な祖母の信じがたい悲惨の物語』や、『闇の奥』『怒りの葡萄』などが引用、または説明されています。

昨年の私の回るとき、対象作品は松田青子『女が死ぬ』でした。その作品にも映画や図像や文化的な事象の引用がたくさんありました。参加した方で、大量の引用作品を調べていただいた方がいたと思いますが、その時、すごく現代らしい作品で、わからなくてもスマホを片手に読めば楽しめるということが話されていたと記憶しています。

ところが、今回の引用小説は、どれもものすごく長いですね。ちよつと調べてあらずじを読んだくらいではわからないような作品ばかりです。最初にいったように、この短編集には時間というテーマが入っていました。そもそもBの凋落や、若さや美の喪失というのも、最終的には死にまで向かっていく長い人生の時間が組み込まれています。それに相当して、引用作品にも長い長い読

書の時間が畳みこまれているといえるでしょう。扱われている移動も、高速や瞬間的なものではなく、人生と重ねあわされているたいへん長い時間をかけた移動ばかりです。少し話がそれますが、他の短編の主人公たちに編み物とか、洋裁に熱中している人物がいますが、こうしたところにも時間というテーマが表れています。どんな工作物でも作り上げるのには時間がかかりますが、あみものの糸やミシンの縫い目は、時間の長さがそのまま長さとして結実する、象徴的な工作だからです。

さて、移動というのは、たいてい、境界の越境を伴っており、そのため、境界について考えなおさせる行為です。境界は、国と国の境、人間の境目、性別、年齢、言語の境もあるでしょう。これは、おそらく「約束された移動」と対になる短編「巨人の接待」にも顕著です。境目というのは区別とか、差別を生んでいくものです。移動は、境目を超えて、ひとつの地域や言語に縛られずに自由にふるまえる行動でもあるのですが、移動自体が強いられるものである、という場合もあります。例えば「巨人の接待」では、どこかで虐げられた人々が、強制収容所を移動させられていきます。移動は、ある種の固定観

念から自由になる、ということだけではなく、追い立てられるような体験でもあるわけです。また、例えば戦時中は、ある国の人が移動し、他地域を占領することによって、そこに住んでいる人たちに母語でない言語を強制したりすることも行われます。逆に、移動がままならない境遇にいる人たちもいます。現在でいえば、パレスチナ、ガザ地区の問題もそうです。移動というのは、現代の私たちが思うような、レジャーとしての旅行などとは異なる側面があることを考えてみましょう。

ガルシア・マルケスの『無垢なエレンデイラと無情な祖母の信じがたい悲惨の物語』（一九七八年）も引用されています。これは、私たちが今読もうとすると、ちくま文庫では『エレンデイラ』というタイトルで出版されています。長すぎるので省略したのでしょうか、それ自体は一つの方法だと思いますが、後でお話するように、この小説の雰囲気を生かすとすれば、長いままの方が効果的です。

このマルケスの小説も、あらずじは「約束された移動」に書いてある通りですが、なんだかお伽噺めいた小説です。エレンデイラが不注意で祖母の家を燃やした罰とし

て、旅をしながら体を売られています。そこに天使のような少年があらわれ、恋に落ち、祖母から解放されるために殺してしまうという、これ自体「おはなし」といったような小説です。ガルシア・マルケスは、ノーベル賞をとったので有名ですが、コロンビアの作家です。寓話的な小説なので、当たっているかどうかはわかりませんが、この小説についても、祖母に虐げられるエレンデイラについて、先進国に搾取される後進国として読む人もいたりします。『闇の奥』もアフリカ大陸を舞台にした小説で、こうしてみると、抑圧とか、苦痛の伴う移動とかが顕在化する小説が取り上げられていることは明らかです。

3. タイトルの意味

『闇の奥』はイギリスの小説家ジョゼフ・コンラッドが一九九九年に発表した作品です。コンラッドも、母語はポーランド語、フランス語を習い、『闇の奥』は英語で書いたという、複数の言語にかかわる作家です。作中ではマローウという人が、アフリカの奥地に消えてしまった象牙の売買に関わっているクルツを探して、アフリ

カのコンゴ川を船でさかのぼっていきます。なかなか姿をあらわしませんが、クルツがどうしてそんなところにいるのか、謎解きの旅にもなっています。象牙の売買ですから、ここには、植民地の資源で儲けを得るヨーロッパの在り方が描かれているわけです。「闇の奥」とは、ヨーロッパから（暗黒大陸）と言われたアフリカのことであるわけですが、こうしたなかでクルツが抱えた心の闇を意味していると言われています。これをみると移動には、征服とか抑圧とか搾取というものが含まれていて、それを問題化しているのだと思います。引用には、クルツの家の周りに、現地の人たちが殺されて首だけがさらされているという印象的な場面があります。

『怒りの葡萄』は、先ほど映画を見たという方がいらつしやいましたが、アメリカの作家ジョン・スタインベックによる一九三九年の小説です。一九三〇年代末、オクラホマの貧困農民が、資本家たちと対立し、カリフォルニアに農地を求めて移動していく物語です。長い厳しい移動の途中で家族が亡くなったり、行先のカリフォルニアに着いてからも差別的な扱いを受けたりします。貧困から逃れようとする長い旅が人生と重なっていると

いうような小説です。「怒りの葡萄」というタイトルが何のことか、私も詳しくはありませんが、調べてみると、神の怒りによって踏み潰される人間のことを意味するそうです。ヨハネの黙示録によっているということです。

聖書の話題が出てきたので、ここで関連づけてタイトルについても考えてみたいと思います。（移動）と（約束）の関係についてです。（約束……）とくると、（約束の地）という言葉が有名です。『怒りの葡萄』でも、ジヨード一家がオクラホマから豊饒なカリフォルニアに脱出するところは、旧約聖書の「出エジプト記」をモチーフにしていると言われていて、間接的に関連があります。聖書の出エジプト記は、イスラエルの民に神がこの地を与えると約束し、彼らがモーゼに率いられ、その土地を目指してエジプトを脱出します。

「約束された移動」というタイトルには、こうした聖書とか歴史とか、いろいろなものがちりばめられていると思うのですが、ちよつと違いがあるなと思うのは、この場合、約束されているのは「土地」であって、そこが目的地になります。（移動）は放浪の途中ということになりますね。その土地に着けば安住が得られることを信

じて人々が移動するのです。しかし、今回の小説では、
〈約束されている〉のは、〈移動〉の方です。ここに、
小説のタイトルのオリジナリティがあるように思います。
これは人生の話でもあるので、目的地が重要という
よりは、長い苦労の過程こそが本体で、だからこそそれ
が祝福されるべきである、という小説のやさしさがあり
ます。これは、誰もが知っている言葉を使いながら、意
味はかなり異なっている、これ自体がひとつの翻訳行為
だと思います。

これは余談ですが、『怒りの葡萄』は、先ほど述べた
ような搾取や迫害の話で、それが真実を描いているのか
をめぐり、社会的に大変問題になり、そのため、オクラ
ホマでは禁書になったそうです。そして、それをきっか
けに、図書館の読者の知的自由を守る決意として図書館
の権利宣言が生まれ、一九四八年にアメリカ図書館協会
が採択した、ということがウィキペディアにも書いてあ
ります(笑)。冒頭に理想の読書のことを言いましたが、
それと関連すると思います。

4. 翻訳文体に広がる特別な世界

さて今、既に歴史的に存在している言葉や物語を使い
ながら意味を変えてしまうことを翻訳と言いましたが、
改めて考えてみるに、翻訳とは何でしょうか。一つの言
語から別の言語に同じ意味を移すことはできるのでし
ょうか。特に意図や悪意がなくても、言語や文化の体系
が違えば、同じ内容がそのまま伝わっているとは限りま
せん。ですが、それは原作の冒流や歪曲という事態なの
でしょうか。『エレンデイル』のタイトルについてお話
しましたが、原作のタイトルがおもしろいとしても、例
えば日本語話者は、『無垢なエレンデイルと無情な祖母
の信じがたい悲惨の物語』という特殊なその日本語のつ
ながりにおもしろさを感じているのではないでしょう
か。翻訳は原作からずれてはいけないという意見もある
と思いますが、どこのものともしれない混ざり合った世
界ができるということも、翻訳の効果ではあります。

翻訳された文学を読んでいると、例えば、実物を言い
表すにはそれが的確なのかもしれないけれど、日本語と
しては実物を写しているというよりは、見たことも聞い
たこともない不思議なイメージが浮かび上がって来る
ことがあります。さきほど、「私」とBは何語で会話し

ているんだろう、というお話がありました。が、「私」の読書タイトルを見ると日本語で読んでいるような気がするし、Bは、といえは外国人のようにもイメージされますね。しかし、それが自然にまじりあっている、そういう世界を作り出してみようということなのだと思います。実際に成り立っている空間ではないのかもしれませんが。

私たちは、特に翻訳ものの「おはなし」に特殊な感覚を持つことがあります。例えば、「シンデレラ」の翻訳で、まあ昔の翻訳ですが、「灰かぶり」とか言ったりします。そんなものは知らないのだけれど、そのいうものがあるのね、と想像していつて、フランスでも日本でもないふしぎな空間やイメージが出来上がります。シンデレラでなくてもいいのですが、翻訳の小説を読んでいると花の名前を「うまごやし」とか「おだまき」とか言われて、日本語にすればそれが合っているのかもしれないけれども、実物が思い浮かぶわけではなくて、言葉づらから立ち現れてくる空想の世界を楽しむことも、翻訳のおはなしの醍醐味だったりします。

だから、「約束された移動」の文体も、わざと「おは

なし」的な言葉を使っていると思います。たとえば客室係の先輩が「ぐずぐずしているひまはないよ」など話すのですが、こういうのは、実際の日本語でナチュラルなわけではありません。例えばシンデレラのお姉さんが「ぐずぐずおしでない」みたいな言葉で話しているイメージがありますけれども、これらは、これは翻訳です、「おはなし」ですということを示すし、「おはなし」の文体です。それを使うことによって、どこにもない世界を構築しているのではないかと思います。

移動と、移動に伴う喪失と、つらいかもしれないけれどそれをいつくしむというようなこと、そして、移動に伴う言語の不自由や多重性、それらは関連した話題なのだと思います。

「約束された移動」と対になっていると考えられるのは「巨人の接待」ですが、この作品では、バルカン半島のマイノリティの言語で書く作家が、すでに世界で「巨人」と祭り上げられ、別の国の商業的なイベントに迎えられ、その際に通訳を務める「私」を通じて彼との交流を描いた物語です。彼は、イベントの場では、期待されることば、翻訳されるはずのことばを全然しゃべりませ

ん。通訳が気をきかせて、人々に喜ばれそうな言葉をでつち上げているわけです。ここでは、翻訳が一つの言葉から一つの言葉に移すことなどではないことが示されています。

彼は収容所の体験を持っていて、その体験をふまえて、小鳥を亡くなった身近な人たちのように思っ語りかけますが、そうした言葉は、グローバルな商売の場に出されないのです。彼にとって移動はつらい体験ですし、食料を得られなかった体験から、旅先の食事では必ずパンのかけらをポケットに入れてしまいます。最後に、公園のようなどころで、絶滅した鳥をかたどったメリーゴーランドに乗る幻想的なシーンがありますが、鳥たちが絶滅したのは自然のせいではなく、人間のせいであることが、大切な人々が収容所で人間によって殺された事実と重ねて語られています。グローバル、などということが言われて久しいですが、例えば英語を、別の国の人と話せるツールとして使うことは世界を広げると同時に、商業的な利便性も伴って大きく広がっていく言葉のかげで、小さな文化や言語が失われることになってはいけないうでしょう。「巨人の接待」は、少数者の言葉

や体験に対して思いを馳せています。

5・不在を表す〈黒〉のイメージ

繰り返しますが、不在によってその重要性を浮き彫りにするとか、越境性を考えるとか、そうしたテーマは全体に通底しています。そこでもう一つだけ、さきほど皆さんが関心を持たれた短編について触れてみたいと思います。短編たちは、誰にも知られないけれども、そつと支えてくれる人がいる、という心あたたまるものも多いのですが、この短編集は一方では非常に怖いイメージを多く含んでもいると思うので、そうした側面を見てみましょう。

「黒子羊はどこへ」、これも、喪失を描いたものであり、それは人間の成長の時間という移動、最後の葬式のシーンの移動などがテーマに関連していますが、私はとりわけ怖い小説だと思いました。

海辺に漂着した誰も引き取り手がない羊を、村はずれに住む夫を失った女性が引き取り、なぜか生まれた子羊は親に似ない黒い羊なのですが、子どもたちがそれを見に来るのをきっかけに託児所を開設して、子どもたちの

あたたかさを感じるという話です。この小説では、子どもがいつの間にか大人になっていくということが語られていました。だっこのできるときにはびったりしているのに、いつの間にかごつごつして離れて行ってしまう。そしてJという人物についてふれられ、彼はスターのように、恋人のように書かれていて、彼がクラブで歌を歌うのを主人公女性はこのり聞いています。Jは、かつて預かっていた子どもであつたかもしれないことが後からうつつらわかってきます。あんなにもいい子子どもは、成長して手の届かないものになってしまう。

子どもたちの成長は喜ばしいことに違いないのですが、そのあと主人公が、子どもたちに黒子羊が死ぬ話ばかりしていることを考えてみると、この主人公は、子どもの成長を子どもが死んだのだとらえているのだと思います。主人公は、黒子羊の死に方のバリエーションを毎日毎日考え、その創作物語を子どもたちに聞かせているのです。付け加えれば、「黒子羊」とずっと呼ばれているそれは、漂着してからずっと時間が経っているもので、今「子羊」なわけはありません。大人であるものに

子どもと名付けるところには、子どもをつよく求める思いを見ることができるとしようし、あるいは「黒」という色を不在や失われた印としてとらえることもできるでしょう。

彼女は自分の子どもをなくした体験も持っているのですが、それだけではない、子どもたちに対する強い哀惜があります。彼女は保母としては有能で、子どもたちについての記録を毎日きっちりつけているとも書かれています。創作話の方は、子どもひとりひとりの死に方、自分のもとから去っていくことを記した、その裏バ―ジョンではないでしょうか。

そして最後、理不尽にも、この本人が不慮の事故でなくなってしまう。そのお葬式があるので、読んでみましょう。文庫本の一九五ページです。「子どもたちは列の先頭を歩く」。彼ら彼女たちは、お葬式なので、黒い服を来ています。村人たちも続きます。お葬式だけど、子どもたちはじっとしていられず、わらわらしています。「本当に黒子羊は行き先を知っているのだろうか。」と、ついていく大人たちは思います。先導しているのは子どもたちだったはずなので、子どもが黒子羊であるかのよ

うに、言葉の上で入れ替わってしまっています。

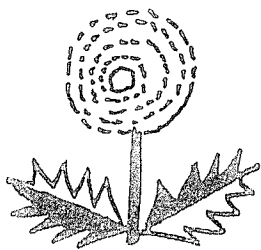
「子どもたちはたとえ自分がよく知っていることでさえ、それを言い表す術を持っていない」。だからこそ、主人公女性に語られるばかりの存在になってしまいうわけですが、「彼らが知っていることは、とても遠い場所に隠れている。例えば皆から忘れられた、生い茂る藪の奥や、羊歯に覆われた冷たい窪み。黒子羊が持つ二つの瞳でしか見通せない、遠い場所。」とあって、やっぱり特別なものを見通せる黒子羊と子どもは入れ替わり、一体化しています。そうして、「死者に相応しい場所を指してどこまでも歩いてゆく」。

こうしてみると、残虐で美しい話だということはできるけれども、温かい話というわけではありません。また、黒という色は、短編群に一貫して出てきました。「ダイアナとバーバラ」でバーバラがもとの夫を黒いマジックで塗りつぶしたり、「元迷子係の黒目」では「末の妹」の斜視の黒目が印象的に書かれたり、エビに食べられてしまうグッピーの黒目のエピソードが印象的です。生き生きしたものが、すぐに黒く変色してしまうことが、この短編には多く描かれ、不穏なイメージを醸し出してい

ます。

以上、いくつかの短編を見てきましたが、移動というテーマについては、きわめて社会的な問題意識であるともいえますが、一方でポエティックな表現をみると、社会についてこうすべきだという主張であるよりは、イメージを揺らがせる言葉の可能性を追及しながら、実存的な問題が扱われているともいえるでしょう。今回の小説は、リアリズム小説が好きな人にはピンと来なかったかもしれませんが、お伽話が好きなとか、詩的な言葉の連関を面白がるような方にとつては、おもしろい小説だったのではないでしょうか。

そうこうしているうちに、約束された時間になりました。この辺で今日のお話を終わりにしたいと思います。



『ドレス』 藤野可織

分かりあえなさを描いた不穩の世界

大井利雄

藤野可織（ふじのかおり、1980年2月～）

京都府京都市出身。同志社中学校・高等学校、同志社大学文学部美学芸術学科卒業、同大学院文学研究科美学芸術学専攻博士前期課程修了。修士（文学）。

大学院を修了してから京都のカメラスタジオでアシスタントとして半年働き、その後は学術出版社で事務のアルバイトをしながら小説を執筆していた。

2006年、『いやしい鳥』で第103回文藝界新人賞受賞。2009年、『いけにえ』で第141回芥川龍之介賞候補。2012年、『パトロネ』で第34回野間文芸新人賞候補。2013年、『爪と目』で第149回芥川龍之介賞受賞。『ドレス』は2017年出版。

（感想）

文学と奇想の垣根を軽やかに超える全8編を収録

8つの短編に共通することは、ひとそれぞれの価値観の相違があるということだろうか。価値観の違いは一方からみればよくわからないのだ。主人公たちが大事にしていることを、読者が理解・同意するとせまっているわけではない。はつきりいつて、すべての物語で、私にとって選択できることはない。

しかし、好みの対象とはならないが、それを選んだ動機・経過については、理解することは可能だ。

『ドレス』のなかの島田の次の判定は誰しも心なかで比較することだろう。

彼は無意識のうちに友人の婚約者の客観的社会

的ランクを査定し直していた。(172頁)

るりの恋人、島田が、初めは戸惑っていたが、コピー機から破れた紙を取り出した同僚の、ドレス店製の指輪をみて、見直し、最終行の様子にほっとした。

彼は彼の体温すべてを傾けてこの手を温めたいと願った。(177頁)

『テキサス、オクラホマ』

私とドローンたちの秘めやかな関係

無機的なドローンが骨格標本に癒されている「心み
たいなもの」とする発想は人間からみた感覚を、人間
関係に飽き飽きしていた薫が無機的な世界、ドローン
の保養所と対照的である。

ドローンにくらべると人間はうっかりできてい
るし、ミスをするのが人間だ。機械だつてこのく
らい上等な機械は休息とリフレッシュを必要とす
るつてことに、わたしたちはなかなか気がつか
なかった。電源を切るとか部品を取り替えるとか、
そんなのじゃ機械はいまいち休まらないんだつて
ことに。(14頁)

『マイ・ハート・イズ・ユアーズ』

子どもを産む選択は女性だと、上司の課長は二番目
の夫の子を産む。雪乃もかわいい夫とついに結ばれ
る。夫が消え、子どもが生まれるということである。

その選択判断は二人にしか分らない。

「帰宅は、夜中になった。(中略) 私の部屋に灯り
が点いていて、そのあたかな光が目奥に染み
る。あそこに、私の夫がいる。まだわりと小さく
てかわいい私の夫が。そして、じきに、私が決断
できないでいるうちに、(同僚の男性) 佐々木くん
みたいにどんどん大きくなってしまふ私の夫が。
決断してあげなくてはいけない。夫はそれを望ん
でいる。男だから、それは、本能で。私も、望ん
でいる。望んでいないことはない、というくらい
の望みだけど、望んでいる。でも、私はもう少し
今のかたちの、つまり他人のままの夫といっしょ
にいたかった。ただ、私のそのもう少し、という
のが夫にとつて致命的なことになるかもしれない
っていうのわかってる、だから」。(50頁)

「私は夫を抱き上げ、膝に載せた。夫が私の首にやわらかで頼りない腕をまわす。『あ、あ、あのね、あのね、子ども、つくろうか。私たち、子どもつくろうか』。しゃくりあげながら、言う。

『こ、今夜』。(中略)『そうか、雪乃ちゃん、決断したんだね』。私の肩に顔をうずめて、夫がつぶやいた。しっかりした声だった。ああ、夫も同じ気持ちなのだ』。(52頁)

私たち夫婦の最後の夜となる。

「夫が整えたベッドで、私は夫の愛らしいくちびるにくちづける。耳に、首筋にくちづけながら、夫の服を脱がせる。白い、少年じみた胸があらわれ、私は自分のお腹のあたりが熱くとりけるのがわかった。夫の裸なんて何度も見てるけど、子どもをつくると心に決めて見るのはこれがはじめてで、最後だ。一度きりだ」。(56頁)

『真夏の日』

メラニン(メラノサイト)に取り憑かれた女の、と

ある一日。無数のレンの伸ばす無数の樹状突起に、内側から絡みとられ身動きが取れなくなる(83頁)

『愛犬』

見知らぬ犬の記憶がまとわりつく。皮膚炎の犬とコアという名のプードル。白井さんの食い違い。

『息子』

不吉な空模様は、7歳のときの自分と現在の7歳の息子と重なる。妻は心配してGPS付きのスマートフォンの見えない愛しいあの子はどこに。妻の幻想。

『ドレス』

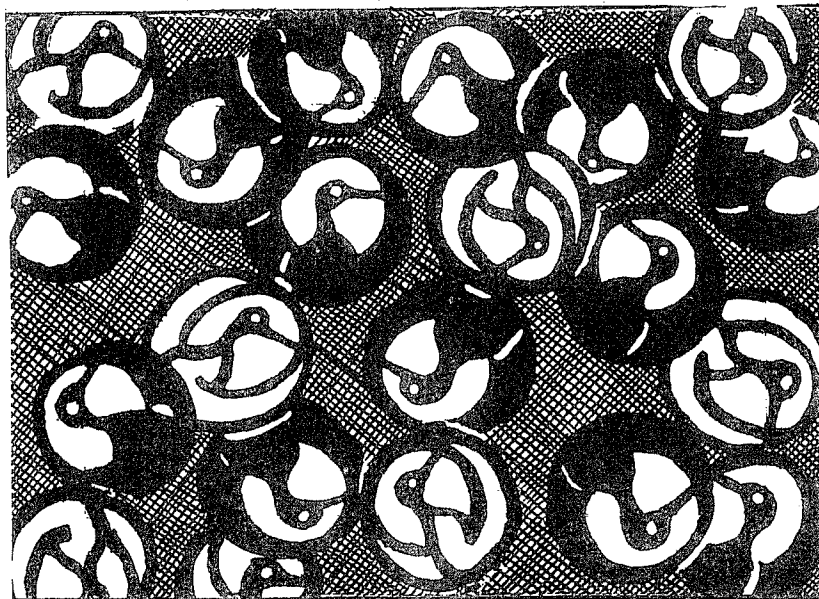
恐ろしい異質のものたちが、恋人の心を奪っていく。

『私はさみしかった』

こんなさびしさは、私がどういう人間か証明することとはできないのだ。

『静かな夜』

耳を澄ませば、レンジフードからあの声が聞こえてくる。あの声は、外の話し声。入り混じった幻想。



作品の補助説明一覧

	題名	語り手／登場者	特記事項
1	テキサス、 オクラホマ	堇	題名は、圭（最初の恋人）の愛用した生肉色のパーカーについて並んだワッペンによる。アルバイト先に M 社のドローン専用保養所の清掃員を選ぶ。人間関係に飽き飽きしていた。様々な骨格見本があり、ドローンは休養する。人間は機械を支配する為ではない。
2	マイ・ハート・イズ・ユアーズ	雪乃	パソコンに映し出される、題名の歌を歌っておどる男の子。 上司の課長が孕んでいる。子どもをつくる選択は女性にあり、そのときは夫は消える。
3	真夏の一日	真夏 レン	表皮の断面図。樹状突起を持ったメラノサイト。レンがほくろと指摘、終日メラノサイトが頭を離れない。無数のレンが次々と目覚める。
4	愛犬	ひとみ	白井か白井か。表札の白、白が壊れている。フローリングもダイニングも白。 生活感のない、片付いた空間。物語りかけた皮膚炎にかかった犬と、別の犬ココア。
5	息子	彼と妻	雨雲の残照。土砂降りの中帰宅した息子。GPS つきスマートフォンを持たせる。マンションの非常階段の途中にぬれたままでいる。柵の隙間から入るのは無理。青いネットストラップの紐を傷ができるほど引っ張った。あの子は？あの子って？妻の妄想か。
6	ドレス	るり 彼（るりの恋人、島田）	るりの右の耳たぶに、鉄のようなものがくっついていて。貝状のイヤリング。デザイナー「ドレスさん」のつくるアクセサリー。ドレスの店を探し当てる。寝ているときも耳から鉄くずをはずさない。戸惑っている。 同僚の円筒形の指にはめたドレス製指輪。るり、ドレスの工房を探してフルオーダーする。彼は無意識のうちに友人の婚約者の客観的社会的ランクを査定し直していた。 傷だらけの甲冑が、真っ赤なダッフルコートを羽織ってこちらにやってくる。彼は彼の体温すべてを傾けてこの手を温めたいと願った。
7	私はさみしかった	私	小学生の頃、秋になると私はさみしかった。新緑ってエイリアンみたい。痴漢に遭うという事はその肉体が美しいという事を意味するはずだ。私は遭った事がない。遭いたい訳ではないが、私のよりカネコフの方が価値が高いとは到底思えない。痴漢行為、ゲイや老人との接触。
8	静かな夜	おれ、ちか子（妻）、はな（ちか子の姉はるか）の娘）	静かな夜だ。家の中に誰かがいる。結婚直後にいないと嘘をつく。真っ暗で雑音のないことを望まれた。レンジフードから、昼間でも聞こえる。たくさんの人が話す声。

『ドレス』（藤野可織）

ーシニールな一発ギャグ

中井あつし

今期の『くにたちブッククラブ』のトップは藤野可織さんでした。

以前、『御伽草子』の現代版を色々と読んでいるときに（代表的なのは太宰治の『お伽草子』ですが）、藤野さんの『現代版』絵本 御伽草子 木幡狐』を読みました。

京都で狐が人間社会を乗っ取るために、良妻賢母を育成し人間の妻にする養成所としてつくられた山城木幡女子高（コン女）の優等生「きしゆ」が飛び級で卒業。年収一千万の一流商社マン藤原とデキ婚、新居は三条通の新築マンション。きしゆは産休後職場復帰し働きながら良妻賢母となりますが、男児が三歳になった頃、人間生活に飽きてしまいます。「みんななあ、人間でかわいそ

う。いろんなことせんならんて自分らで決めて、そんでいろんなことできひんで自分らを責めてほんまむだやんなあ。能力低いのに」と人間をバツサリと見下すブラックユーモアのお伽噺に書き替えられています。

この本には巻末に、元の御伽草子の『木幡狐』が掲載されていて、そこでは「きしゆ御前」は「われ人間と生れなば、かかる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなる戒行によりて、かやうの身とは生れけるぞや」と狐に生れたことを残念に思っています。ところが現代版では狐は長生きで能力もすこぶる優秀と改変してあるのは、現在の女子高生最強説に合せたものなのでしょう。現代の京都弁の女子高生の会話も楽しく、水沢そらさんの表情を

消したイラストも本作のドライな世界観にぴったりだ
と思った本でした。

この本で藤野可織さんという作家に関心を持ちまし
たが、それつきりになってしまっていたところに、今期
のブッククラブへのラインナップでした。

藤野さんは芥川賞を受賞されていると知り、受賞作
『爪と目』を読んできました。「爪と目」というタイトル
だけで、不気味さを感じますが、冒頭の一文「はじめて
あなたと関係を持った日、帰り際になって父は「きみと
は結婚できない」と言った。あなたは驚いて「はあ」と
返した」を読んだ瞬間、頭の中にクエスチョンマークが
三つも四つも浮かんでしまいました。「あなた？」、「
父？」、「きみ？」、次の「あなた？」から始まって、「わ
たし」と「あなた」って誰なの？という人称の揺れに振
り回されます。さらに「わたしは三歳の女の子だった」
という文でますます混乱に陥ります。もちろんこの本を
読み進めるうちにこの人称の混乱は徐々にほどこけて行
きますが、最後にカラストロフィが訪れます。

とても読みやすい文体ではありますが、難解な構成で

語られ、さらに母の死、古本屋店長、わかり合えない父
と娘といった途中で現われる様々なブックに引きずら
れミステリ小説、ホラー小説のような面白さも感じられ
ました。基本に人称の揺れに引きずられる不安定感がこ
の小説を支配して、私はそこがとても面白く感じました
が、合わない人も多そうだなという感想をもちました。

その後に、今回の『ドレス』を読みました。八編の短
編集でした。

それぞれの話は二〇〇三〇頁位ですが、読み始めて人
物と設定が提示されるうちにすぐ迷路に迷い込む感じ
があつて、まるで『爪と目』のような雰囲気があります。
しかも迷路をさまよっているうちに全く違う出口に着
いてしまった感覚になる短編集でした。

最初の『テキサス、オクラホマ』は、ださいパーカー
を着ている人を揶揄する話かと思っていると、「ドロー
ンが利用する保養所」でアルバイトをしていると書かれ
ていて、なんでドローンに保養所があるんだ？骨格標
本？「心みたいなもの」って何？とか思いながら読んで
いると、これは一体誰の目線なの？とますます分からな

くなるいう不思議さでした。村田沙耶香さんの小説にも似たぶっ飛び方が感じられる作品でした。

二編目の『マイ・ハート・イズ・ユアーズ』は参加者の方も指摘されていましたが、アンコウの生殖後にオスがメスに吸収されていくような雌雄の融合が不気味ですが、その底流には現代社会での根深い女性への差別問題、産休の取りにくさなどの問題へのアンチテーゼが含まれているのは確かです。

三編目の『真夏の一日』は何度読んでも私は意味がつかめず、完全にお手上げでした。「真夏」は人の名前なのか、季節のことを言っているのか判断が付かず、さらに「メラノサイトの（中略）かわいらしくて寄る辺のない樹状突起のライン」と書かれてしますが、全く想像のつかない表現でした。

四編目の『愛犬』は「臼井」と「白井」さんの混同など子どもの頃にありがちな事柄から始まって、首に潰瘍のただれた犬が出てきて、次に「ココア」という名

前の犬が出てきて、臼井さんの家は「生活感」がなくて、夫や子どもたちの存在感もないし、犬も果たして本当にいたのか？（最初の犬は名前すら付けられていないらしい）読めば読むほど想像が広がっていく作品でした。

五編目の『息子』も前作の『愛犬』同様に息子の様子が色々書かれていますが、名前も分からないし、存在に不安定さを感じられて、本当に息子がいるのかどうか分からなくなってくる作品です。こう書くところの作品は嫌いなのかと思われそうですが、実は『愛犬』と『息子』の揺らいだ不安定感のある小説は私の大好物なのです。

次が表題作の『ドレス』ですが、彼（島田）の彼女の「るり」の愛するドレスさんの作るアクセはかなり个性的です。るりが甲冑をがしやんがしやんといわせながら待ち合わせ場所に現われても、誰も違和感を抱かない状況はかなりシュールで、これはもう最後に来た一発ギャグに笑って良い作品だと思います。そして笑いと一緒に、そんな彼女を心底愛している彼の愛情もしっかり感じられるステキな作品になっています。

七編目の『私はさみしかった』は表題に反して、妄想の激しい女子高生「カネコフ」、たぶんカバー絵に描かれているゲイのカップル、露出狂の老人と全然さみしくないストーリーです。

最後の『静かな夜』は、レンジフードの風の音が鳴っていると思えば怖くないですが、「地獄からの声だよ」とか言われたら絶対に寝られなくなってしまうので、怖がらせないで欲しい。

この一冊を読み通したとき、とても疲れました。推理小説のように最後にストンとした謎解きがあるわけではなく、むしろ最後にもう一つ謎が掛けられていくような結末の作品が多いからです。こういう本は今回のブッククラブのように大人数で色々な感想を聞くのも楽しいし、少人数の読書会で疑問点の読み方を突っ込み合っても面白い本になるだろうと思いました。

この本を読んだ後、『朝倉かすみリクエスト！ スカートのアンソロジー』（光文社）という「スカート」をテー

マにして九人の女性作家が短編小説を競作するという本を読みました。その中に、藤野可織さんの『スカート・デンタータ』という作品も掲載されていました。

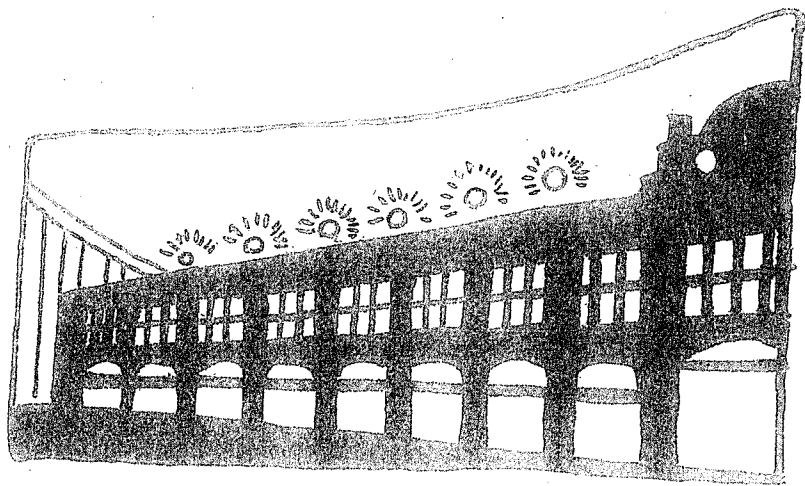
満員電車の中で痴漢の手首が女子高生のスカートに生えてきた歯で噛み切られるという事件が発生します。それを皮切りに、その後、手首以外にもいろんな所を噛み切られる痴漢たちが続出します。果たして痴漢は加害者なのか被害者なのか？過剰防衛？テロリスト？身を守るためにスカートを穿く男子までもが続出します。すると痴漢している本人が「あんな危ないもの（スカート）は取り締まるべきだ」と言い出しますが、痴漢とかセクハラする人の「露出が大きいのが悪いんだ」と言い訳する感覚ってこんなものなのかもしれないと思わされました。

今回この文集を書くために、別の本も読んでみようと思ひ、『おはなしして子ちゃん』（講談社）という十編入りの短編集を読みました。

冒頭の表題作は小学生の女子が理科準備室のホルマリン漬けの猿の標本に魅入られるというかなりホラー

な短編でした。

二作目の短編『ピエタとトランジ』は、殺人誘発体質の女子高生探偵と（探偵小説の定番として）その相棒役の女子高生が登場し、ズバズバと犯人を指名していくストーリーです。この作品は好評だったようで、『ピエタとトランジ』完全版Ⅴ（講談社）として長編小説が出版され、その後文庫本にもなっています。ただ、短編の中で十人も死んでいるので、「三人以上人が死ぬ（または、殺される）小説は読まない」ことにしている私にはとても読めそうもない作品ではありますが。



『ファースト クラッシュ』を読む

―三姉妹三様の恋の身体感覚―

関 美智子

小説を読む時、私は単行本で二回読む。一回目は、本の手の感覚のまま素読。二回目は精読。三回目は文庫本で読み、最後に解説を読んで、本の記録をする。

この小説の表紙絵は何を意図するのだろうかと思いつながらページをめくると「ファースト クラッシュ」とは初恋であるということを初めて知った瞬間であつた。

(一) 著者の略歴

一九五九年東京都生まれ。明治大学文学部中退。宇都宮の実家に戻る。ある日新聞連載の宇野千代『生きていく私』を読んで作家を志す。宇野千代から作家の作法を学び師事。そして一気に書き上げた作品『ベットタイムアイズ』が八五年文藝賞を受賞し、鮮烈にデビュー。同

作品は芥川賞候補にもなるが受賞ならず。八七年『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』で直木賞。八九年『風葬の教室』で平林たい子賞。九一年『トラッシュ』で女流文学賞。九六年『アニマル・ロジック』で泉鏡花賞と文学賞を次々と受賞。その後も現代文学の旗手として旺盛な執筆活動を続け、二〇〇一年『A2Z』で読売文学賞。〇五年『風味絶佳』で谷崎潤一郎賞。一二年『ジェントルマン』で野間文芸賞。一六年「生鮮てるてる坊主」(『珠玉の短編』所収)で川端康成文学賞を受賞する。その他『ぼくは勉強ができない』『学問』など高校生向け小説がある。

(二)、この小説の構成とその内容

一、構成

第一部、第二部、第三部の構成である。

第一部は二女の咲也が語り、島崎藤村の『初恋』が挿入されている。第二部は長女麗子が語り、中原中也の『春日狂想』が挿入され、第三部は三女薫子が語り、寺山修司の『かくれんぼ』の詩が挿入されている。

二、内容

①登場人物（高見澤家）

前記三姉妹のほかに

- ・高見澤家の主人である父親誠は、祖父の代からの輸入貿易会社を引継ぎ経営している。長女が短大に入學してまもなく、くも膜下出血で急死

- ・母親美沙子は専用の温室（サンルームとも呼ぶ）を持ち、その管理とそこでの、人を招待してお茶会を開くのが楽しみ。現在は介護付きの有料老人ホームで暮している。

- ・家政婦タカさんは祖父の代から仕えている通いの家政婦。高見澤家の家事一切を任せられ、三姉妹の相談事や恋の手ほどきまで。彼女は周囲の空気を即感じ取る。タカさんも二十年前に亡くなっている。

- ・新堂力は母がなくなったので、神戸から高見澤家の主人に連れられて来て、高見澤家の一員として生活するようになる。二女咲也と同年の男の子。

②あらすじ

この小説は三姉妹の回想（思い出）へタイムスリップして、三者がそれぞれの立場で語る。新堂力が高見澤家に来たのは、長女麗子一二歳、二女咲也一〇歳、三女薫子は六歳の時である。時がたち、三姉妹のうち、二人は五〇代に、一人は四〇代半ばに。当時、新堂力が女の園へ入って来た時の様子から、彼が高校を卒業して郷里の神戸まで帰る期間のことが鮮明に書かれている。長女と二女は結婚し、三女は独身でキャリアウーマンとして活躍中。現在初恋の相手新堂力にプロポーズして、その返事待っている。果して初恋の人との結婚は成就するのだろうか？ 楽しみの余韻を残す小説である。

(三) 三姉妹のファーストクラッシュの身体感覚の表現の抜粋※相手は三人とも新堂力。

一、二女咲也の場合

① 咲也と力との会話から一例

「おれは、生け贄なんだ」

「…そんな…何の生け贄だつていうの？」

「俺にも解んないよ！でもそう感じる。」

力の途方に暮れたような瞳が見る間に潤んで行く。その様子を眺めながら、私は感動していた。何だろう。この感覚。

② 国語の「文学概論」の授業の中から

島崎藤村の『初恋』を聞いて心に不思議な化学変化が？台所で力が投げてよこした齧りかけの紅玉の景を思い、詩の言葉は、あの時の情景を連動して―壊していく―その粉々になった欠片は涙となつてはらはらと落ちる。

二、 長女麗子の場合

① 麗子と力との会話から一例

「この家の女の人ら、みんなで寄つてたかつて、おれのこと、はみ子にしよる。それ、なんですか？」

それを聞いて麗子は泣き出してしまったのです。

「なんで、おまえが泣いとう？」

「リキ君が可哀相で……ごめんなさい。私、ひ

どいことをしてごめんなさい」

すると、力は立ち上がって言うのです。

「嘘泣き」そして

「涙にも色んな種類があるん知つとう？」

② 中原中也の詩の場面

ある日。麗子が温室で休んでいると、力が入ってきました。麗子は力を邪魔だといって出て行くようにいいます。

「…邪魔…ですか」

「そうよ！―今だつて静かにおとうさまのことと思ひ出しているんだから、あっち行つてよ

!!」

「じゃ、慰めてやるよ、おまえがおれにしてくれたみたいにさ、慰めの詩、聞かせてやる」

それは中原中也の『春日狂想』でした。麗子が立ち上がったはずみに植木鉢がこわれたのです。力は麗子の足許の植木鉢の欠片を拾い集めながら詩の言葉を紡ぎ出すのを止めません。愛するものは、死んだのですから、たしかにそれは、死んだのですから……

そして立ち上がり、麗子に近づく

「どういうつもり？まさか復讐？……」

「復讐じゃなくて、お返し。あんたのお父さん死んだんだからさ、それ、解らせてやんなきゃって思ってたさ」

麗子が手をあげると同時に、力がその手首をつかんで、麗子を抱き寄せて、口づけを受けていたのです。そして力は麗子の涙を拭って笑いました。

「嘘の涙でもない、本当の涙でもない。こういう涙がいいや。」と力は言うのです。

これが、麗子と力の最後の口づけとなりました。こうして力は高見澤家をあとにしたのです。

三、三女薫子の場合

薫子は力が高見澤家にやってきたときのことを次のように語っている。

力はこれまでに見たことのあるどの男の子とも違って、ひと目で夢中になった。見ているだけで飽きなかった。まるで、迷い犬を観察するように

な気持。――絵本の中にしかない少年が、私の側にいる！

この男の子は、私の特別になる！力を「お兄ちゃん」としてなどありきたりの存在ではなく、自分だけに与えられた貴重な贈り物として。薫子のファーストクラッシュも力が相手であった。

(四) この小説の感想

私にとってははるか彼方に置き忘れていた初恋であったが、楽しく読め、詩の挿入によって心豊かになった至福の時間であった。三女と力の成長に接し、思春期の成長の学びは大きいと思った。そして関西弁のソフトさに救われたような心地がした。力の言葉で「……おながくくなれば……なんでもいいです」は印象に残っている。

(五) まとめ

著者は、山田詠美／ジェーン・スー対談『対談 私たちのファーストクラッシュ（文学界）二〇一九・一一』の中で「一番不穏でいやらしいのって純愛とか呼ばれる

もの。やっぱりプラトニックなところの恋愛であり、初恋じゃないかと思っています。心が発情期と連動しているぶん、いちばんよこしまで。だから激しいし、価値観を壊されやすい。」そして「S的なものとM的なものが交互に行き交って反転したり、もう一回ひっくり返したり、そういう感じでいく人間関係が大好きで。特に恋愛小説においてはそういう関係性が好みなんだろうと思う。」と。

まるで恋愛小説の講義を受けているような、錯覚を感じたのでした。

それから詩の挿入については、「言葉というものにごく厳密でありたい……。どんなにつたない詩であっても、恋には人を詩人に変える力がある。」と。この対談はよい学びとなった。ジェーン・スーさんは作家で、山田詠美さんの大ファンということである。

また、この文庫本の「解説者の作家町屋良平氏は一六歳の時に山田詠美の作品を読み、「ファーストクラッシュ、作家となり、いまだに山田詠美を師とし、恋している。」と述べている。

最後に講師の榎本先生が、三編の詩全部と『山田詠美

／ジェーン・スー対談』の資料を配布して下さったことに感謝。以前、対談はスマホで見えていたが、目が疲れたが、紙文化により見やすく、参考になった。詩の効果を思いしらされたのであった。



きみの鳥はうたえる（また新しい読み方を知る）

中島 三恵子

約10年ぶりのブッククラブ（前文学講座）に参加させて頂いた。8冊（1回ナマケ7冊）の作品と講師の先生のお話は大変興味深い楽しい時間でした。この講座は8回とも講師の先生が違う為、各々に個性があり切り口が違ふ所も魅力のひとつと思っています。あの先生はどんな風に話されるのかな？とより期待がわいてくるのです。

私にとって今回は初めての先生でした。そしていつものことですが、作品や作者も初めて聞いた人でした。題名の『きみの鳥はうたえる』とはどう言う意味なのか———と思うながら読み始めると暴力的熱は感じるが、まったく希望がないネガティブで自堕落でなんて暗い話なのだと思いました。

そして、チヨロチヨロ出てくる国立の様子が気になり私の興味はついついそちらは流れてしまい、佐和子のアパートは大学通りを南に行くのだとすれば、当時うちもアパートしてたけど、うちにはいなかったナー残念だったナー小説に書かれるチャンスをはがしたなー等と妄想をふくらませ、おまけにビートルズには興味がない、私は音楽のことはまったく分からず……ただ、私の知らない国立の町を徘徊していた「僕」のお話をミ―ハー気分で読んで行きました。

当日、大木先生は、一回り参加者の感想を聞いた後配られた何枚もの資料を見ながらお話してくださいました。それは作品だけにとどまらず、作者の年譜、時代背景、同時代の作家、友人と本当に色んな面からのお話で

した。

私はビクリテーマの作品よりも、もつと濃厚な佐藤泰志という作品を聞いた気がしたのでした。まず、佐藤泰志は貧しく不遇な作家であつたが人には恵まれていたこと、熱狂的な支持者が核となり再評価につながったこと

若い頃から小説家をめざし地方では認められるも芥川賞は取れず、中央文壇には入れなかった。作家賞を取つた『もうひとつの朝』で2重売りの問題などもおこしアルコール依存症で入院し、最後は自殺をしたという私の聞き間違いでなければ、先生は似た人ということ、梶井基次郎を上げたが、わたしはだんぜん太宰治だー！と思つた。先生は佐藤泰志は同時代の村上春樹や中上健次に並ぶ、才能をもっていたが地味であつたといった。私はスケールと魂の迫力がチト違う気がした。（これは私の浅読みのせいかもしれないが……）

題名の『きみの鳥はうたえる』はビートルズのタイトルからとつているとのこと、私はきみの鳥はうたえない

の方が良いのではと思つた、でも最後にうたつたということなのかな？

先生はこの作品がもつ軽さや新しい若者の関係、自立した女性などがハードボイルドタッチでボクという三人称で書かれている男性的小説といわれた。

又、この作品に描かれている生きづらさ、閉塞感は裏側にある現実、バブルのふれふわと浮薄に生きてる時代を感じさせる、そして、この閉塞感バブルが去つた今の時代とも共感し合うということでした。

この作品は軽やかな文体で人間を新しい感じにしているが、実は古風で普遍的な作品なのだといわれた。そして、佐藤泰志の作品は青春の文学として価値があるのでは、と……

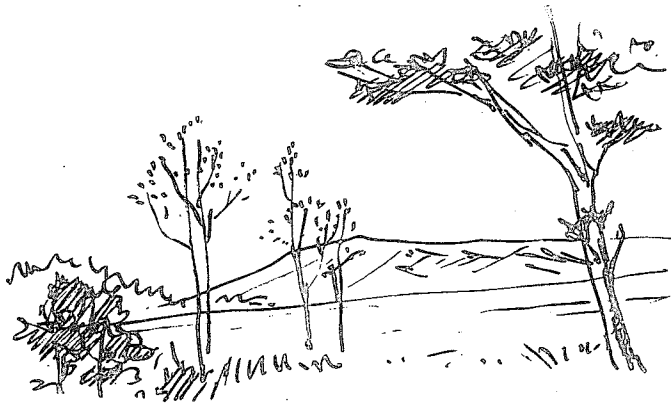
最後の静雄の母親殺しは、私は自然の流れのように感じた。間違つた最悪の行為ではあるが、静雄にはこれまでのふざけた生き方をしてきた自分が見えていたので

はないか、そして受け身ながらも辛抱して生きてきた母の壊れてしまった姿がまっとうではなかった自分と重なって絶望したのでは、母親の醜い姿を見たくなかったのではないのかと、むしろあるあるの話なのかなと……。

先生が時間の多くを使って作品よりは作者や同時代の人の評論や社会背景を話されたのには意味があったのでした。

この私小説的な作品を理解する為には、そのバックにいる作者佐藤泰志の生き方を知ること、そして、その時代がどのような時代であったのか作品の中で登場人物はどう生きたのか、それらが重層的に響き合って作品の魅力を伝えるということでした。

以前、この講座で小説は必ずその時代を映しているから時代を知ることが大切と山崎先生は話されていましたが、この作品はその上に今の時代をも巻き込んで考えさせる、改めて私小説の読み方が分かった気がしました。



『熱源』 川越宗一

「文明」の理不尽さと熱く闘う樺太アイヌの人

大井 利雄

※ページ数は全て単行本のものによる。

川越 宗一（かわごえ そういち、1978年9月13日、鹿児島県生まれ、大阪府出身。桃山学院高校を経て、龍谷大学文学部史学科中退。

バンド活動を経て株式会社ニッセンにて会社員として勤めるかたわら、2018年に『天地に燦たり』で第25回松本清張賞を受賞し作家デビュー。2019年『熱源』で第9回本屋が選ぶ時代小説大賞受賞。2020年『熱源』で第162回直木三十五賞受賞。2023年『パシヨン』で第18回中央公論文芸賞受

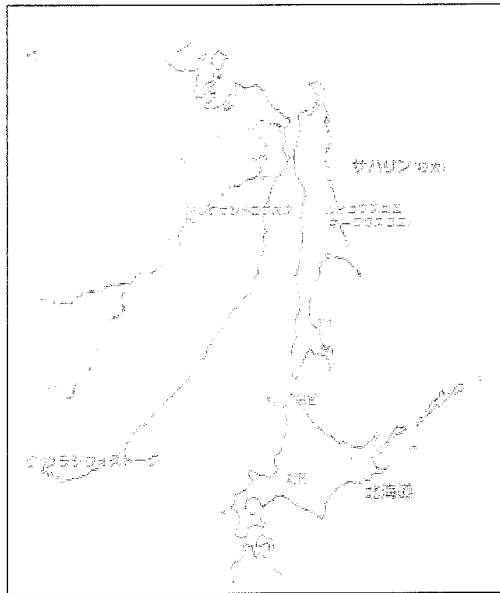
賞。

1 はじめに

（1）概要 アイヌ民族を題材とした歴史小説で、明治維新直後から太平洋戦争の終戦までの、期間が書かれている。

主人公の一人のアイヌ、ヤヨマネクフは、樺太（サハリン）で生まれた。日本とロシアのあいだで領有権が揺れる島から出ることを余儀なくされ、北海道の対雁（ついしかり）で暮らす。開拓使たちに故郷を奪わ

れ、集団移住を強いられたのち、天然痘やコレラの流行で妻（対雁村一番の美人・五弦琴の名手…キサラスイ）や多くの友人たちを亡くした彼は、やがて山辺安之助と名前を変え、ふたたび樺太に戻ることを志す（「俺が、彼女を連れて帰る」）。



一方、ブル
ロニスワ
フ・ピウス
ツキは、リ
トアニアに
生まれた。
ロシアの強
烈な同化政
策により母
語であるポ
ーランド語

を話すことも許されなかった彼は、皇帝の暗殺計画に巻き込まれ、苦役囚として樺太に送られる。そこで先住民（ギリヤーク）の狩人（チュウルカ）と出会ったことから、民族学的な興味を持つ。

アイ村のアイヌ頭領バフンケの姪チュフサンマ（流行病で夫と子を失った）を娶る。

物語は2人それぞれの視点で幕を開け、彼らの人生が交差し展開されてゆく。

日本人にされそうになったアイヌと、ロシア人にされそうになったポーランド人。文明を押し付けられ、それによってアイデンティティを揺るがされた経験を持つ二人が、樺太で出会い、自らが守り継ぎたいものの正体に辿り着く。題目の『熱源』は文中に頻繁に語られる二人の象徴的な想いである。

金田一京助が山辺安之助の半生を「あいぬ物語」としてまとめた生涯を軸に描かれた。

（2）二人の主人公

・山辺安之助は、1867年（慶応3年）樺太に生まれる。1923年（大正12年）に逝去。白瀬轟

（のぶ）の南極探検隊に樺太犬の犬糧担当として参加した。樺太アイヌの指導者として、集落の近代化や、子どもたちへの教育に尽力した。（「アイヌを救うものは、決してなまやさしい慈善などではない。宗教でもない。善政でもない。ただ教育だ。」金田一京介の『あ

いぬ物語』に口述筆記している)。

・ブロニスワフ・ピウスツキは1866年リトニアの没落したポーランド貴族の家に生まれる。ペテルブルク大学の法学部に入學。1887年、アレクサンドル3世暗殺計画に連座して懲役15年の判決を受け、サハリン(樺太)へ流刑となる。この時の処刑者には首謀者にしてウラジミール・レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤーノフがいた。弟は後にポーランド第二共和国初代国家元首となったユゼフ・ピウスツキ。

(3) 樺太の歴史概要

近世以前、樺太にはアイヌ、ウイльта、ニヴフなどの先住民が居住し、主権国家の支配は及んでいない。

近代以降、樺太の南に隣接する日本と、北西に隣接するロシアとが競って樺太への領土拡張を求めて植民を進め、多くの日本人とロシア人が樺太へ移住するようになった。

1855年(安政2年)の日露親条約では樺太には明確な国境が設けられず、日本とロシアとが混住する土地のままとされた。

1875年(明治5年)の樺太千島交換条約によって、以前から日本領であった北方領土にくわえて千島列島(得撫島から占守島)を日本領とする代わりに、樺太の全土がロシア領と定められた。

1905年(明治38年)から1945年(昭和20年)までは、日露戦争の結果、北緯50度線を境に、樺太の南半分(南樺太)を「樺太(カラフト)」として日本が、北半分(北樺太、北サハリン)を「サハリン(ロシア語:Сахалин)」としてロシア及びソビエト連邦が領有していた。日本領有下においては、南樺太およびその付属島嶼を指す行政区画名として「樺太庁」が使用された。

2. 感想

(1) アイヌの生活描写

アイヌの文化や樺太の厳しい風土の中での生活が一貫して軽妙な筆致で描かれている。与えられた環境で、必死に工夫をして生きていくための、犬ぞりの扱い、狩猟の技のするどき、カモシカの処理、熊送りの習慣、入墨など。男性と女性の役割、頭領の下での家

族制度。

(2) 人をつなぐ五弦琴

五弦琴は、和人、樺太アイヌ、ロシア人、ポーランド人（エストニア人）、ギリヤークと多数の人の出会いのなかで民族の生きてきたあかしを伝えてきた民俗学の象徴的となった一例である

対雁一番の美人で、五弦琴の名手キサラスイは、西郷従道の酒席で弾けと命じられたが、自分が楽しくて弾くので他人様のためには弾かないと、断る。「野蛮人の趣向ならたいしたものではないだろう」と永山からなじられ毅然として弾く音は、緊張感を高め場を静めさせた。大西郷も踊った。「アイヌも国家、差別をつけてはいかん」

キサラスイと連れ添いになった、ヤヨマネクフだったが、種痘が流行した時、種痘をきらったキサラスイも伝染する、瀕死の状態であつたに、五弦琴を教えて亡くなる。

バフンケではたらくイペカラのところへきた和人風の男（ヤヨマネクフ）がイペカラの琴を取り上げ弾く。それまでの警戒心をすっかり忘れて聞き惚れた。

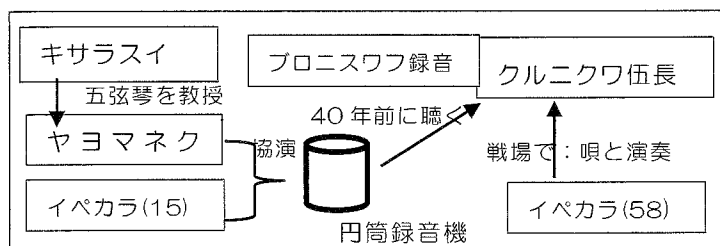
バフンケへ来たプロニスワフはイペカラの歌と演奏を聞き感動。

ヤヨマネクフがイペカラの弦にあわせて唄い、「トンコリ」を録音する。「私たちは滅びゆく民と言

われることがあります。」「けれど決して、滅びません。」「もしあなたと私たちの子孫が出会うことがあれば、それがこの場にいる私たちの出会いのような幸せなものであるように、あなたと私たちの子孫の歩む道が、ずっと続くものでありますように」(250ページ)

この録音の音は録音の直後、40年前、ロシア赤軍のクルニクワ伍長が民俗学を研究時に聞いた。戦争終結を知らず戦っている樺太で、イペカラは琴をかかえ

結を知らず戦っている樺太で、イペカラは琴をかかえ



て逃げまどい、捕虜となったとき、クルニクワに問われて弾く。その音は研究室で聞いたのと同じだった。

(3) ブロニスワフとチュフサンマの娘

ヤヨマネクフ(山辺安之助)の友人千徳太郎治は、和人の父とアイヌの母を持つ。学門が好きで教員関係を続け、またブロニスワフを手伝って樺太アイヌの調査を行い、学校建設、教員として指導にあたった。金田一京助とも知り合いになる。

樺太アイヌの歴史や文化、各地の地勢について詳説した著書『樺太アイヌ叢話』を記した。

太郎治の記録によって、キヨが自分の出自をしる章に涙がこぼれた。バフンケ、ブロニスワフの二者選択(家族を残すか、ロシアで残れるか)の結果である。

(金田一京助)は落帆村で安之助と再開した十三年前、その足で樺太東岸の大頭領バフンケ翁の屋敷も訪ねた。そのとき出会った翁の姪の子という十歳だった。助教就任の報告も兼ねて白浜旅館の若女将キヨ(チュフサンマの子)を訪ねる。

千徳太郎治の『樺太アイヌ叢話』の中のキヨの写真の注釈に「ポーランド人にして露国モスクワ大学教授とアイヌの混血児であります。名前は木村清子

(キヨ)(中略)」とある。

「キヨさんだよ、これ」

写真の中のキヨは隣の女の子の手を握り、うつむいている。白黒で印刷の質が良くなく、注釈がなければ誰ともわからない写りだった。

それでも、キヨはページを凝視していた。

「これがあたし、髪がぼさぼさね」 軽く言って微笑みながら、その目はページを離れない。

「ポーランド人にして――」

父について声に出しながら、格好だけは立派な若女将のキヨの目から、ひとすじの涙がこぼれ、すぐにそれは滂沱と流れていった。キヨは瞬きもせず、ぬぐおうともせず、ただページを見つめ続けている。

研究を続けよう。金田一は、強く誓った。無為に見られても、拱手傍観に思えても。

決して滅びぬと念じて生きた人々に出会い、その人

たちが遺した子孫と共に生きる自分にすべきことが、
しがない学究の徒にできることが、きっとあるはず
だ。(396ページ)

(4) ブロニスワフの熱い思い

流刑囚として樺太に送られた、ブロニスワフは、ポーランド人、ロシア人という人種の違い、またロシア人のアイヌに対する理不尽な行為に接し、文明とはなにか懷疑的な疑問を抱く。救うのは教育だと沸々たる思いが生じる。

文明が、樺太のアイヌたちをアイヌたらしめていたものを削ぎ落としていくように思えた。自分たちはなんの特徴もないつるりとした文明人になるべきなのだろうか。(139ページ)

文明つてのに和人は追い立てられている。その和人に、おれたち樺太のアイヌは追い立てられ、北海道のアイヌはなお苦勞している。(52ページ)

体が魂の死を待つばかりだった自分を蘇らせてくれたのは、諾々と故郷を奪われた無実に近い罪で世界を追われた無力な自分に居場所をくれたのは、ギリヤー

クの人々だ。(140ページ)

「弱肉強食の摂理の中で、我々は戦った」という大限の問いに、ブロニスワフはきつ然とつぎのように覚悟を語る。

「その摂理を戦います。弱気は食われる。競争のみが生存の手段である。そのような摂理こそが人を滅ぼすのです。だから私は人として、摂理と戦います。人の世界の摂理であれば、人が変えられる。人知を超えた先の摂理なら、文明が我らの手をそこまで伸ばしてくれるでしょう。」あの島の人々に分けてもらった熱が、ブロニスワフに言葉と決意を与えている。(327ページ)

「異民族たちの暮らしは文明との接触により脅かされている。時代の趨勢は変えられずとも、より穏やかな出会いのために我々ができることは、きつとあるはずです」言葉を奪われても、自分が誰かといくことをさえ知っていれば、そこに人(アイヌ)は生きている。それが摂理であつたほしいと願った。(376ページ)

(5) 山辺と金田一京介との話　いきるための熱は人

「俺たちは滅びる定めなんていわてゐるらしいな」

「それが本当なら俺たちの居場所はもう、あんたが持つてゐるそのノートの中にしかないのかい」(339ページ)

アイヌとして文明の中で生きていく知識を広めるために作った学校が、アイヌを日本人に作り替える場所にされようとしている。(343ページ)

生きるための熱の源は、人だ。人によつて生じ、遺され、継がれていく。それが熱だ。(371ページ)

「俺たちはどんな世界でも、適応して生きていく。

俺たちはアイヌですから」「アイヌ種族に、その力があると」「アイヌって言葉は、人って意味なんですよ」

強いも弱いも、優れるも劣るもない。生まれたからは、生きていくのだ。すべてを引き受け、あるいは補いあつて、生まれたのであるから、生きていいはずだ(375ページ)

(6) 戦争終結を知らず戦う源田

国家、民族の不合理を、源田一等兵の戦う姿勢にみる。また教育のもたらす結果が、洗脳にもなりうる怖さを示

す。

一方、上体を起こそうとしたイペカラは「死ぬぞ」と赤軍兵士のクルニコワ伍長から引つ張り止められる。

オロツコの若者の源田は語る「俺たちは日本の戸籍がない。和人とアイヌだけ。いつかは戸籍をもらえる立派な日本人になるように。俺たちは学校でそう教わつてきました。三年前に一斉に招集状をもらつて、俺たちは兵隊になりました。戸籍のなかつた俺たちは、天皇陛下の軍隊に入れてもらえたんですよ」(404ページ)

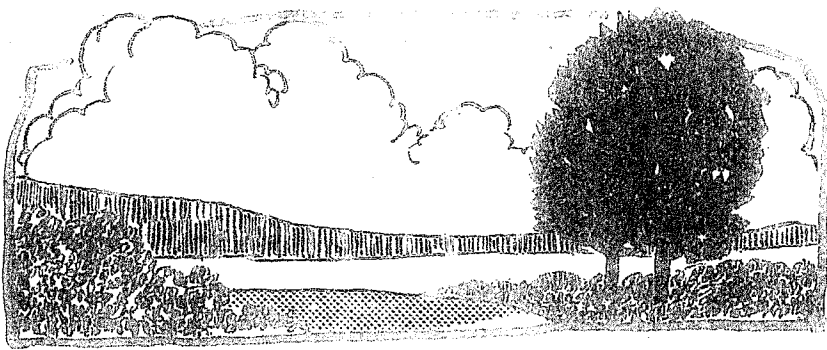
負傷している捕虜クルニコワ伍長が、イペカラの襟首を思い切り引つ張り「死ぬぞ、あんた、誰かがとめねばならない」「戦争も何もかも、生きてゐる人間が始めたんだ。生きてゐる人間が緊張らなきゃ、終わらないだろ。あたしもあんたも、まだ生きてゐる。なら、できることがある」(422ページ)

「“次”とか“また”とか“まさか”というのは、生きてゐる限り、あるもんさ」

——もしあなたと私たちの子孫が出会うことがあれば、それが、この場にいる私たちの出会いのような、

幸せであるように。大学の資料室で聞いた声が、いま聞こえたように思えた。錯覚だとはわかる。目の前に蹲る女との出会いが幸せだったとは、到底いえない。

……戦争はまだ続く、(中略)それでも生きよう。そう思った。生きたいと思えるまで生きてみよう。(426ページ)



『熱源』を読んで

国家に翻弄されながら生き抜いた人々の物語

岡野 正義

『熱源』は、第一六二回直木賞を受賞した作品で作家・川越宗一の長編第二作目となる。キャリアも長くないようだ。

文庫本で四百八十二ページで、七十年間ぐらいの歴史の流れの物語だ。

登場人物も多く、アイヌ、サハリンの少数民族ギリヤーク、オロツコ、和人、ロシア人、ポーランド人等民族も多種に渡っている。

舞台も北海道、サハリン・ヴラジヴォストーク（今の日本の読み方ではウラジオストック）、リトアニアの古都ヴィルノ、東京、パリ等場を変える。

作者が主要参考文献の後に「この物語は史実をもとに

したフィクションです」と記述している。実名の登場人物の残した資料も参考文献に上げられ、しっかり読み込んだ上での作品だと思われる。

中心となる登場人物は、樺太で生まれ北海道で育ったが、故郷を求めて樺太に戻ったアイヌのヤヨマネクフと、リトアニアに生まれ、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して囚人としてサハリン（樺太）に送られ強制労働を強いられたブロニスワフ・ピウスツキである。

国策として和人を北海道開拓に送り込み、さらに樺太への和人の流入政策により、先住民アイヌの土地は狭められ、食料調達の大事な森も切り倒されていった。

それと並行してアイヌの差別はずっと続いていた。

「犬呼ばわりされる」前半に出てくる屯田兵の責任者永山准大佐は、「彼ら未開人はわれらによって教化善導され改良されるべきなのです」「自ら立つことを能わず国家の温情で養われる分際」等と発言する。(注1)

文明というものに和人も追い立てられている。その和人にアイヌも追い立てられている。「文明ってな、なんだい」ヤヨマネクフの親代わりのチコビローは、「馬鹿で弱い奴は死んじまうっていう、思い込みだらうな」と言う。

ヤヨマネクフは、散々苦勞した後「俺たちはどんな世界でも適応して生きていく」「強いも弱いも、優れるもない。生まれたから、生きていくのだ。すべてを引き受け、あるいは補いあって。生まれたのだから、生きていくはずだ」と題名通り熱い思いを語る。

もう一人の主人公、ポーランド人ブロニスワフは、取り調べ中の拷問で手足の爪二十枚を剥がされ、サハリンで懲役十五年の強制労働を課せられた。

サハリンの少数先住民族のギリヤークの人たちとの交流を深め、言葉や風習を調べるようになり、民俗学に生きがいを見い出すようになる。

ポーランド、リトアニアもロシアの支配下にあり、国

名も消滅し、名前もロシア語風に呼ばれる。

サハリンで先住民族に寄り添い研究してきたブロニスワフは、ロシアのチリ学会でのヨーロッパの一般的知識人の「高度に発達した文明を持つ我々には彼らを適切に統治し、より高次の発展段階へ導く必要と使命があります。異族人たちは我々と同じように合理性を持ち、科学的思考が可能な知性があるのか」あるいは「優れた人種が劣った人種を憐れみ教化善導するという、ヒューマニズムを装った支配の名分が出来あがる」という考えに出会う。

この意見にブロニスワフは、「幼少の適切な時期に教育があれば、教養と科学的思考能力を得られる。我々の目には原始的に見えるその生活は、当日の風土や気候に適した合理的なものです。呪術的に感じられる思考は、その精神世界の豊かさゆえとも言えます」と切り返す。さらに「彼らの知性を論ずる前にできることがあります。豊かなものは与え、知るものは教える。ともに生きる。絶望の時には支えあう」

この言葉は今僕らが直面し、絶望的にも感じる世界を考える上で大事なことだと思う。

故郷ポーランドに帰国の途中立ち寄った日本で、政治家大隈重信に会う。大隈は、「世界は弱肉強食である。強ければよいのだから。我らはより強くなる。欧州の列強も凌駕する。力が足りぬから、あなたは故郷を失った。弱肉強食は摂理だ」と述べる。

ブロニスワフは、次のように反論する。「弱きは食われる。競争のみが生存の手段である。そのような摂理こそが人を滅ぼすのです。だから私は人として、摂理と戦います。人の世界の摂理であれば、人が変えられる。人には終わりの滅びも無いと考えます」

この作品を読み応えのある物語として成り立たせるうえで個性的な登場人物が何人も登場する。

ヤヨマネクフの親代わりで樺太から北海道へ移住後アイヌ部落のリーダーとなるチコビロー、幼馴染みで白瀬中尉の南極探検に共に参加するシシラトカ、アイヌの子共達にロシア語や日本語を教えることに力を注ぐ千徳太郎治（セントクタロウジ）、主人公二人を援助する実業家で樺太アイヌの頭領バフンケ。

女性たちも物語を支える重要な存在だ。五弦琴（トンコリ）の名手でヤヨマネクフと結ばれるが若死にをする

キサラスイ、アイヌの頭領バフンケの命でピウスツキの子供を設けるチュフサンマ、ここでは終章に登場し、読み手に強い印象を与えるトンコリ奏者イペカラを取りあげる。

序章で日本の敗戦宣言直後にサハリンに進軍するロシアの女性兵士クルニコワの記述があるが、トンコリ奏者として各地を巡り生計を立てていたイペカラとの出会いを終章に配置するのは巧みな構成である。

クルニコワは、四十年前に大学の民族学の講座でイペカラのトンコリを聞いたのを思い出した（四十年前に出会っていたのだ）。録音したのは、ポーランド人のビルスドスキー（ロシア語の読み方）。イペカラは自分の知った人間だと確信した。

ちよっとした行き違いで対峙した旧日本軍とロシア軍の兵士の戦闘を二人が止めることになる。

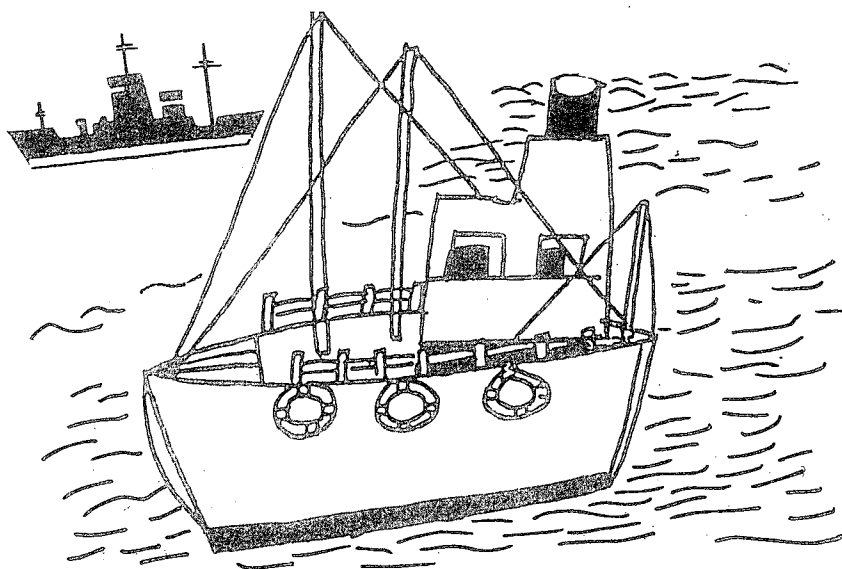
「戦争も人がやっていることなんだ。生きている人間気張らなきゃ終わらないだろ、誰かが止めないと。」「まだ生きているからできることができた。」

もがき苦しんで精いっぱい生きた多くの人たちを描くことでこの物語は終わった。

文庫本の解説は信頼のおける作家の一人、中島京子で、
良くまとまっていて感心させられた。

注1 佐渡山豊「人類館事件の歌」一九〇三年大阪博
覧会でアイヌ、琉球、朝鮮、インド、ジャワ等の人を野
蛮人として実際に観客に見せた事件。このことを批判し
てコザ出身のロックシンガーが歌った（CD有り）。沖縄
の作家が戯曲化して昨年沖縄で上演された。東京でも以
前小劇団が上演し観たことがある。

補足 名前や言葉が奪われることは、様々な所で行わ
れる。アイヌ人も日本人名でないとパスポートが取れな
い。朝鮮の日本統治下では創氏改名が強制される。沖縄
の学校で沖縄弁で話すと体罰があった。



ドライブマイカーを読んでみて

岩井としえ

女性には、上手い運転をする人があまりいない、つぶやき、まあ、独白のようなどころから、始まっている。知人から運転の上手い若い女性「ぶっきらぼうで、無口でくわいげのある娘というようなタイプじゃないくちよつとぶすいかもしれません。」と紹介され、「あまり美人だとこっちも落ち着かないし、妙な噂が立つても困る」と、受けて雇う。

“行きの車の中で、仕事のテープ『ヴァーニャ伯父さん』のヴァーニャ伯父さんの台詞聴きながら、それにあわせて台詞を読み上げた。”

帰りの車で聴くのは、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲。(名曲集とかソナタではなく、これか！いい選曲って自慢?) もっと、軽い音楽を聴きたいときには、ビーチ・

ボーイズやラスカルズやクリーデンス、テンプテーションズ。(若い世代にとって、馴染みのない曲かけて、何か言ってくるのを待ってるの?)

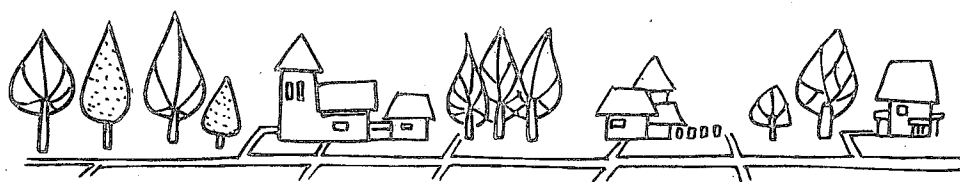
く彼女がそれらの音楽を好んでいるのか、苦痛に思っているのか、あるいはまったく何も聞こえていないのか、家福にはどれも判断できなかった。感情の動きが表に出てこない娘なのだ。くこの先に、反応がないから、落ち着いて、台詞の確認ができる、と、この主人公、若い女性の運転手のこと、いろいろ知りたくなっているようだ。その気持ち、素直に認めず、反応なしは、落ち着く、と自分に言い聞かせている。(なるほど、ふくん。) ここで、脱線、「女のいない男たち」短編集の一番先に、「ドライブマイカー」、最後は、同じタイトルの、「女の

いない男たち」。このヒロインは、車の中で、「エレベーター音楽」をよくエレベーターの中で流れているような音楽　パーシー・フェイス、マントヴァーニ、レイモンド・ルフェーブル等等。「無害な音楽が宿命的に好きだった。流麗きわまりない弦楽器群、心地よく浮かび上がる木管楽器、ミュートをつけた金管楽器、心を優しく撫でるハープの響き、絶対に崩されることのないチャミングなメロディー、砂糖菓子のように口当たりの良いハーモニー、程よくエコーを効かせた録音。」このあたりを読んで、うん、うんと納得。こういう音楽、苦手だったので。年をとって丸くなり、これはこれで、いいじゃない。と言えるようになっていくが。音楽の好みの中で、鋭いのが良い、ゆるいのが、甘い、というようなことではない、と言っておきたい。

こちらのヒロインは、こう言った音楽（エレベーター音楽）しかかけさせない。主人公の男は、ふたりでいる時、自分の好みの音楽は、全くかけられない。この箇所、長々引用しちゃったのは、エレベーター音楽という言い方は知らなかったが、いわゆるムード音楽、好みではないので、ふむふむと読んだからだ。高齢者向けに、ぜー

んぶ揃ってお安くなっています。のコマーシャル、よく見かけた。こだわらない、ちよつといい音楽、うるさいのや、気難しいのは、いやよって感じ。多数派の音楽。「ドライブマイカー」に戻ると、車の中で流れている音楽について反応がないのは、ありがたいことだ。この後、書類のことで、色々話してもらったり、雇った運転手からも質問受たりしているうち、「よく見ると君はなかなか可愛い。ちつとも醜くなんかない」（月並みな口説き文句！）ってツツコミたくなるが、今は、マア、まあ、まあ、「くくくただあまり器量がよくないだけです。ソーニャと同じように」（おやおやおや！グツときますね！自分の仕事の『ヴァーニャ伯父』読んでくれていたんだ！それだけでは、ありません。生前、雇い主の奥さんが、他の人と浮気をしたこと、「心なんか惹かれていなかったんじゃないですか」「だから寝たんです」さらにその先には、「みんな病がやったことです。頭で考えても仕方ありません。こちらでやりくりして、呑み込んで、ただやっていくしかないんです」うん。運転手からかなり、踏み込んでいっているね。恋愛小説？この短編、『女のいない男たち』他の短編は、女は去ってしまったか、い

なかったか、だ。この短編だけ収まりよく終わるの？主人公家福にとって、一番言って欲しいことだけを言ってくれる人、こんな人いるのかなあ、ラスト、家福は、「少し眠るよ」みさきは返事をしなかった。そのまま黙って運転を続けた。家福はその沈黙に感謝した。さやはり言って欲しいことを言ってくれ、あとは沈黙。運転の上手い人、美人じゃなくていいから、よく見ると可愛い、こんな人そばにいてこの小説に、ビートルズ出てこなかったが、ファンとしては、ここで、「ドライブマイカー」を聴きながら、終わりにしたい。



『むらさきのスカートの女』

―「わたし」の承認欲求から生まれた可笑しくも哀しい作り話―

東 健太郎

1 最初に

今村夏子作品を読むのは初めてです。最初読んだときは、読みやすい文章でお笑いの要素もあり、不思議な魅力を感じましたが、何か不自然さも感じました。

その後、多くの考察を読み、改めて読んでみましたが、最初に感じた不自然さの理由がわかったような気がしました。

2 信頼できない語り手

わたし(権藤チーフ)が語り手で、主に「むらさきのスカートの女」を私立探偵よろしく観察した様子をどこかの聞き手に語る構成ですが、さすがに顔バレするだろう、と言う箇所が非常に多いです。途中から「むらさき」は権

藤チーフの職場に来るわけですから、権藤の顔を知っているわけです。P103では、二人がバスに同時に乗り込むわけですが、車内はガラガラなのだし、そこで気づかないなんてあり得ないでしょう。

三人称であれば神の視点ですから対象人物の会話や心情なども普通に描けるわけですが、一人称だとそうはいきません。「むらさき」が何を言っているのかは、近寄らないとわからないわけです。でもそこで顔バレの危険が発生します。

P84では「わたし」は公園で「むらさき」と子供たちの会話を聞いてその内容を克明に語っているわけですが、近くに寄らないと無理でしょう。

疑問点はそれだけではありません。P109で「わたし」

は「先ほどの居酒屋で、生ビール三杯とえのきバターとホテルイカの沖漬けを頼み、会計をせずに出てきたからだっただった。」とあります。P71とP131で周囲から権藤チーフは下戸だと言われています。これは矛盾しています。また、無銭飲食しているのに店の人が追っかけてこないのもあり得ないでしょう。

また、「むらさき」のキャラクターも作り物めいて一貫性がなく、ホテル清掃員に採用されてからのジェットコースターに乗ったかのような浮き沈みも嘘くさいと思います。

どうも、「わたし」の言っていることが信頼できません。ここに至って気がつきました。本作における「わたし」は「信頼できない語り手」であることに。「わたし」が語っていることは壮大な作り話である可能性があるのです。「むらさきのスカートの女」にからむ話はすべて虚構。「むらさき」はいなかった。したがって、彼女を見ている「黄色」もいなかった。こう考えると、すべてが符合するのです。

3 「むらさき」を登場させた理由

では、なぜ「わたし」はこのような作り話を語ったのでしょうか？「わたし」こと権藤チーフは家賃を滞納していて、金に困っているのもホテルの備品を小学校のバザーに流したりもします。また、人と上手くコミュニケーションを取れません。職場のホテルでも存在感がなく、認めて貰えず、公園に行っても子供たちからも無視されます。孤独で淋しい。だけど、私もみんなから存在を認めて貰いたい。だから、存在感のある人に憧れる。黄色を着ている私に対して正反対の色である「むらさき」を着ているような人に。そんな人と友だちになって自分も存在感のある人間になりたい、という痛切な心の叫びがこのような作り話を生んだのではないのでしょうか？実は自分も公園で子供たちにタッチされたいのだと。

「むらさき」が座るとされる公園のベンチのシートには、実は最初から権藤チーフが座っていたのです。そう考えると、哀切感がひしひしと伝わってきますか？ところで、当ブッククラブの大山さんも巻末の図書室月報に本作のレビューを載せてらっしゃいますが、「この話の全ては黄色いカーディガンの女が創り出した一

種の妄想なのでは」と、私と同じ見方をされており、「むらさき」実在説が多い中、大変意を強くしました。ぜひ
大山さんのレビューもお読みください。



降り注ぐ悲しみの中で

―今村夏子『むらさきのスカートの女』を読む―

津田 仁

日本社会は1990年に始まったバブル崩壊後、政府はその事態に対処すべき有効な手段や施策を生み出せず、経済界は人件費削減を図りこれまでの終身雇用から非正規職員の採用に切り替えた。結果、非正規職員が増加し、そこで働く者は身分保障の不安定な中、安い賃金の中でぎりぎりの生活を余儀なくされる多くの若者たちを生み出してきた。この小説は、そうした時代の波にもまれながら生きている一人の女性の姿が描かれている。

1 あらすじ

この小説に登場する主人公の名前は権藤という。職場を転々としながら今、非正規職員の身分でホテルの清掃

作業員として働いている。年齢は30代。両親は20年前離婚し一家は離ればなれになったまま音信不通である。フルタイムで働いているが給料は安くアパートの家賃と食事代を払えばぎりぎりの生活を余儀なくされている。当然、思わぬ出費が発生すれば家賃が滞納し漫画喫茶などに一時避難することになり、実際にそういった事態にも遭遇している。友達はいない。性格はおとなしく、自己主張せず、職場では一応チーフとして仕事を任されているが仲間からはなぜか無視されている。

そんな主人公にもある日友達になりたいと思う相手が見れる。“むらさきのスカートの女”だ。名前の由来はいつも紫のスカートをはいいているところからきてい

る。本名は日野まゆ子という。彼女は主人公のアパートの近所に住んでおり、近所の公園の決まったベンチに座りクリームパンを食べている姿を見かける。主人公は何故か彼女に興味を持って友達になりたいと思いたち、ストーカーのごとく身辺調査を始める。観察結果は次のとおりだ。

容姿は小柄な体型で肩まで艶のないバサバサの黒い髪を垂らしている。瞼は一重、顔にシミがあり黒いホクロがある。爪は真っ黒。彼女は公園の近くのボロアパート201号室に住んでいる。一週間に一度商店街のパン屋にクリームパンを買いに来る。近所ではちよつと有名な人らしい。現在無職。時期によって働いたり働かなかったりする。公園で遊ぶ子供たちの遊びの対象とされている。実家に兄夫婦とその子供2人がいる。調査と並行して主人公は次なる手段に出る。現在、彼女は無職で生活に困っている様子なので就職を応援することにした。手段として、いつもむらさきのスカートの女が座るベンチに就職情報誌をそつと置くことを始める。彼女は何度か情報誌の連絡先に電話などで問い合わせることがよく断られてしまう。そこで主人公は最後の手段として自

分が勤めるホテルの清掃作業員の職を紹介し、無事採用となった。そこから事態は大きく動くことになる。

彼女は無事就職し、ホテルの清掃作業員として初日を迎えるが自己紹介での声が小さくて聞き取れない。その時自分の名前の後にむらさきのスカートの女と呼ばれていると言ったが主人公以外誰にも聞き取れなかった。気にした所長が彼女に発声練習と挨拶の訓練をした結果、大きな声で受け応えが出来るようになり清掃作業員のトップに君臨する塚田チーフ兼専属トレーナーの下で職場訓練が始まる。訓練は通常三か月くらいかけて行われ、塚田チーフの終了のハンコが押されなければ一人前に仕事ができない仕組みになっている。

彼女は所長からの訓練の成果を生かし、てきぱきとした受け応えと挨拶で周りの者を驚かせ同時にこまめにメモを取り、塚田チーフの言うことを忠実に実行して信頼を得る。そして異例ともいえる就職5日目に塚田チーフの訓練終了のハンコをもらったのである。主人公はこれまで抱いていたむらさきのスカートの女に対するイメージの変化に戸惑いながらも観察を続ける。そこで得た情報は次のとおりである。むらさきのスカートの女は

中高一貫校の陸上部で6年間短距離をやっていた。要領が良さそうである。挨拶もしつかりできる。そして仕事帰りも彼女の後を付け公園で子供たちと遊んでいる姿を確認し、通勤はもちろん彼女と一緒にバスに乗り観察を怠らない。二日目の通勤バスの中でむらさきのスカートの女と友達になりたくて突然彼女の鼻をつまもうとするが、その時彼女が痴漢に遭い捕らえて下車する。それを聞いた所長は心配して自分の車で彼女を朝晩送り迎えするうちに二人はねんごろとなり所長は彼女のアパートに泊まるようになる。それを知ったホテルの清掃作業員は彼女を妬みやっかみの対象として見るようになり、それまでかわいがられていた塚田チーフをはじめとする全職員から無視されるようになる。そこに事件が起きる。ホテルの備品が紛失し、それが小学校のバザーで売られていたことが発覚する。それまで従業員によるホテルの備品の使用や無断の持ちかえりは日常的に行われていたが今回それが公に発覚したのである。そして皆はむらさきのスカートの女が犯人と断定する。バザーの開かれた学校が彼女の家の近所だということもその理由に挙げられる。彼女と付き合いのある所長も同時に

疑われ彼女のアパートに行つて自分は潔白であること、彼女が備品を盗んだことを自白するように迫る。そこで口論となり彼女に押された所長は2階のアパートから転落する。ここでも一部始終を見ていた主人公は事件現場に登場して初めて彼女と対面し口をきく。そして所長はすでに死んでいると嘘の言葉を告げて警察の来ないうちに逃亡することを勧める。その時主人公も一緒に彼女と逃亡するつもりでいた。やつと彼女と友達になれるチャンスと思つたのかもしれない。そして生活用品は主人公がアパートを追い出された場合（その時家賃滞納で追い出されていた。）を想定してあらかじめ駅のロッカーに預けていたものを一部取り出して電車に乗り指定したホテルに宿泊するように告げ、戸惑う彼女に無理やり実行させる。その後、主人公は駅のロッカーの荷物すべてを持ち去られ、指定したホテルに彼女はおらず、行方知らずのままであることを知る。軽い脳震盪で済んだ所長は、むらさきのスカートの女からストーカーされて無理やり付き合うように脅かされていたことにし、事件の幕引きを図る。そして塚田チーフ以下従業員も主人公の私も何もなかったかのように元の日常に戻った。

2 小説の背後に見えてくるもの

この小説を読み終わって私の心中に強く刻まれたものが二つあった。

(1) 貧困とモラルハザード

この小説では登場人物の中に貧困とモラルハザードが密接につながっているように思える。

清掃作業員として働く主人公の賃金は低く、とりわけ独身の女性が安心して日常生活を送れる十分な賃金は支払われていない。主人公の働くホテルの実態を見るとそのモラル低下の状況が見えてくる。所長は毎日前日の清掃作業の結果を報告し、不備な点は注意するがホテルの備品等の紛失については、取り立てて問題にしない。所長が清掃作業を塚田チーフ以下作業員にすべてを任せてしまっている結果、いつしか作業員はホテルの備品を勝手に個人的に使用しかつ自宅に持ち帰っており、それに対し何ら罪の意識を持っていない。またそのことを所長も知って見ぬふりをしている。こうした職場風土の醸成は過酷な労働条件の下、安い賃金で働かされている者たちがいつしか陥ってしまう姿なのかもしれない。貧困は人の心までも蝕んでゆく。

一方、そうした状況下に置かれた人々に限らず、モラルハザードが社会のあちこちで日常茶飯事起きているのを見聞きするにつけ、言いようのない悲しさと怒りを覚える。そしてそこに、この日本という社会が長い時の中で培ってきた良質なモラルの崩壊が静かに始まっているような感覚を覚えるのは私だけであろうか。

(2) 社会の中の孤独

もう一つは社会の中の孤独である。

小説の主人公はむらさきのスカートの女と友達になりたいと小説の中で2度もつぶやく。主人公の家族の消息は絶たれ、友達もない。生活はぎりぎりのところで営まれており、病気や事故にあえば即、アパートを追い出され、果ては路上生活となるかもしれない。しかも本人の性格からか人付き合いが無く周りから無視されており、かつ積極的に働く気力も感じられない。そんな彼女もなぜかむらさきのスカートの女と友達になりたい一心で、ストーカーまがいの行動までとる。私は主人公の生い立ちとその日常の姿を追っていくうちにそこに何故か言い知れぬ悲しみと深い孤独を感じた。同時に世の中には目立たずひっそりと生きているこうした者も

存在することを忘れてはならないと思った。

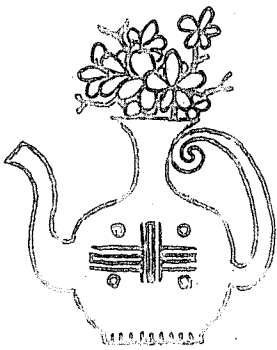
人間はどこまで孤独に耐えられるのか。孤独を孤独と感じられなくなってしまうまで孤独であり続けるしかないのか。他人からの無視には慣れるかもしれないが、自分自身を無視することはできない。なぜならその先にあるのは私という一個の人間の存在を自らの手で消し去ってしまうことになるからである。そんな主人公の前にも一筋の光がさす。友達になりたかったむらさきのスカートの子には逃げられたが、小説の最後に公園で遊ぶ少年たちにポン！と肩をたたかれた時、主人公は、あ、私は生きている！と自分の存在を始めて実感し、同時に「黄色いカーデガンの女」として、一人の人間としてその存在が認められた瞬間だったのかもしれない。

3 今、この社会で生きる意味を問う

家族の崩壊、貧困、孤独。この世の不条理を一身に背負って生きているかに見える主人公の姿は明日の私の姿かもしれない。孤独や悲しみ不安を抱きながらそれでも生きていかなければならない人間の宿命。それでもこの社会で生きていく意味は何か。

主人公は一見、他人からの無視など気にせず、現状を

受け入れ、ただひようひようとマイペースで生きているようにも見える。その姿は社会の様々なしがらみの中で生きている私たちに生き方そのものを問うているようにも見える。生きるとはどういうことか、私ははたして自分の望む人生を生きているのか、この世界で生きる意味はあるのか、ふっとそんなことを思ったりする。問い続けてもその問いの向こうには何も見えてこないかもしれない。しかし、私という存在を今、私自身がはつきりと認識することで、それまで社会の中に埋もれかけていた私を、私の中に存在するあるべき社会の場所へと移行できるかもしれない。そしてその場所に向かって歩み続ける私にその問いそのものが良き伴侶となって導いてくれるかもしれない。



じわる『むらさきのスカートの女』（今村夏子）

中井あつし

今村夏子さんの小説はエキセントリックな人物がいて、不気味な（が失礼なら、不穏な）世界が繰り広げられていく作品が多いですが、本作もカバー絵から不穏なムードが立ち上ります。一枚のスカート状の布地の中から四本の脚が伸びています。本作を読んでいくうちにこの状況が分かってきます。

冒頭で「むらさきのスカートの女」を「黄色いカーデイガンの女」が観察している様子が淡々と描かれて行きます。「むらさき」は年齢が不詳で化粧っ気ありません。週に一度パン屋でクリームパンを買い、商店街の先の公園の一番奥のベンチ（むらさきのスカートの女専用シート）に腰を下ろし、パンを食べます。

その様子を見ている「黄色」は「むらさき」が自分の姉に似ているとか、小学校時代の友達に似ているとか、さらにワイドショーのコメンテーターや、前に住んでいた町のスーパーのレジの女の人に似ているとか想像は膨らんでいきますが、読者には「むらさき」の人相はさっぱりつかめません。その挙句、「黄色」は「わたしはもうずいぶん長いこと、むらさきのスカートの女と友達になりたいと思っている」と告白し、しかも「むらさきのスカートの女の家ならとつくの昔に調査済みだ」と言つて、自分がストーカーであることを臭わせています。「むらさき」の就職していた期間と無職の期間を月ごとに記録したメモを付けている当たりもストーカーぶりを発揮しています。

友達になるためには自分の勤め先に「むらさき」を面接に行かせるのが効率的だと思って、専用シートに求人情報誌を置いたり、サンプルのシャンプーを手渡そうと涙ぐましい努力をしています。このあたりはこの本の中でも最も滑稽な部分で、笑ってしまいます。

やがて「むらさき」は「黄色」の目論み通り駅前の高級ホテルの清掃係に採用されます。

「黄色」はようやく「むらさき」と友達になれると喜びます。通勤のバスも一緒、職場も一緒なのですが、「黄色」は職場の同僚には「無色透明」のような存在で居ないも同然の扱いか、もしくはイジメの対象になっている様子で、一向に名乗りすら上げられません。

「無色透明」になった「黄色」はその間も「むらさき」の働きぶりを、カバー絵の一枚の布地をかぶって歩くようにつきまといて記録していきます。

やがて、ホテルの備品を小学校のバザーで売って小銭稼ぎをしている者が居ること、「むらさき」と「所長」（既婚、来年小学校入学の娘あり）との不倫、さらに「むら

さき」と「所長」の小競り合い中に起きた「所長」の階段からの転落事故とまるでミステリのような展開になっていきます。本作は百五十ページほどの中編小説ですが、先が気になってしまつて一気読みしてしまいました。

本作では冒頭部で「むらさき」が奇妙な女だと思わせるような「黄色」の観察が書かれています。ストーリーが進行していくと、むしろ奇妙なのは「黄色」の方だという、冒頭と結末では随分違った見え方になってきます。くにたちブッククラブの参加者の中で指摘していた方もいらつしやいましたが、「黄色」はミステリにおける「信頼できない語り手」だったことが明らかになります。また「黄色」の女はむしろ「無色透明」ではないかと思わせるほど、普段は存在感を消していますが、内実は妄想力抜群の「腹黒い」女だったことが分かるのです。

本作はミステリではありませんが、「むらさき」と「黄色」の立ち位置の変化に気付いた瞬間、叙述トリック的なパラダイム転換が起きて、一気にものの見方が変わってしまうという快感を得られます。

以前くにたちブッククラブで取り上げた文庫本『こちらあみ子』の中に『ピクニック』という短編小説が掲載されていました。その中で、人気お笑いタレントと婚約している（実は妄想です）と言う割には見た目のさえない七瀬さんを（妄想を信じている振りをして）応援している様子のルミたちよりも、真っ向からあり得ないと攻撃する新人の方がむしろ七瀬さんとまともな関係を結ぼうとしていました。その作品でも語り手はルミ寄りの「信頼できない語り手」でした。一見応援しているように見えても実は、私たちの心の中に潜んでいる「無意識の悪意」を象徴しているような話でした。

今村さんの作品にはこのように読み手をモヤモヤに包み込み、やがて鮮やかなパラダイム転換を見せてくれる作品が多いように思います。

『むらさきのスカートの女』は、じわる悪意、ブラッくなユーモアと、「黄色」が専用シートに座りこの先起きそうな無限ループの予感など魅力たつぷりの作品でした。

ただし、読み手の中には「黄色」が「むらさき」に（まるでこの本のカバー絵のように）ぴったりとくっついて観察しているのに、存在感のない「黄色」が一切気づかれないというのはおかしいのではないか、推理小説だったら絶対に苦情が来る進行だと言う人がいるかも知れません。私は今村さんのファンとして、本作はそこにリアルを求めない小説だと弁護しておきます。以前読んだ阿刀田高さんの『シェイクスピアを楽しむために』（新潮文庫）の中で、阿刀田さんは「なぜかシェイクスピアの劇では変装（『ヴェニスの商人』『リア王』など）は絶対にバレない」と言う趣旨のことを書かれていました。

また、この回の講師の佐藤泉先生も「覗き見の文体、透明人間のような語り手」で「人格としてはほぼ非在」という仕掛けが含まれていると解説されていました。

今村さんの『ピクニック』を引き合いに出しましたが、七瀬さんも「むらさき」も共にアパートの二〇一号室に住んでいるという共通項があります。

また映画『花束みたいな恋をした』（土井裕泰監督・坂元裕二脚本・二〇二一年）の中で、ともに大学四年生の

麦（菅田将暉）と絹（有村架純）が好きな本の話をして
いるうちに、今村夏子さんの本が出てきます。

麦「うん、まあ、こちらあみ子も大好きですけど…」

絹「ピクニック！」

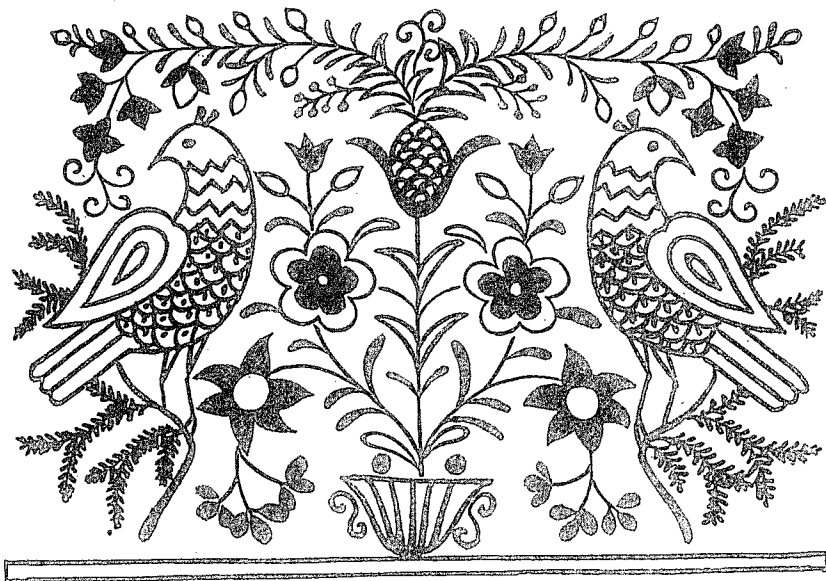
麦「あー。あれは衝撃でした」

絹「ですねー」

と言う会話があり、その後、絹が就活の中で圧迫面接
を受けた後に落ち込んでいる場面で、麦が慰めの言葉を
次のように掛けていました。

「偉いのかも知れないけど、きっとその人（圧迫面接
をした面接官）は今村夏子さんの『ピクニック』を読ん
でも何にも感じない人だと思うよ」

この麦と絹の会話は文芸フリークであることをいさ
さか誇示するようなやりとりですが、純粋に文学を読む
ことのできる心は私も大切にしていきたいと思います。



選評から見た今村夏子ワールド

『むらさきのスカートの女』を巡って

矢野 勝巳

今村夏子の名を知ったのは、今村が初めて書いた小説「あたらしい娘」（後に「こちらあみ子」に改題）により第26回太宰治賞（2010年）を受賞した時であった。この作品を読む前に選評（『太宰治賞2010』筑摩書房2010年）を読んだ。4人の選考委員のうち、3人が今村作品を推薦し、加藤典洋（文芸評論家）だけが受賞作ナシと主張した。

加藤は、「この人の小説を書くという姿勢に、何かとても基本的なものが激しく欠けている」として、「この後、この人は、その力量と可能性に見合うよい小説を書く小説家にはならないのではないか」という極めて厳しい評価だった。加藤は当時、長期間日本を離れていたため誌

上参加であり、選考会会場で話し合えば見解が少し変わったのかもしれないが。今村自身も「受賞の言葉」では、「次に一体なにが書けるのか、なにを書きたいのか、自分のことなのにいくら考えても答えがでません」と記している。

だが、小川洋子と三浦しをんは絶賛した。小川は、「最後のページをめくり終えてもなお、あみ子の感触だけは胸に深く染み込んだまま、いつまでも薄れる気配を見せなかった」という。そして、「読み手から言葉を奪う小説。これこそが「あたらしい娘」が受賞作に相応しい理由であると思う」と結んだ。三浦しをんは、文章のテンポがよくユーモアが漂っている点を評価した。さらに、作者

が哀しみを「もし説明できるのであれば、小説を書く必要も情熱も生じるはずがないだろう」として、本作は「小説は説明ではなく描写で成立すると証明しているし、それは同時に、人間は説明しきれぬ感情や言動で構成された生き物であるという真実をあぶりだしている」とも書いている。

私は選評に刺激されて読んだが、不穏な空気が漂うし、かし離れがたいこれまで読んだことのないタイプの作品として強く印象に残った。

同じ新人賞でも芥川賞は発表された作品を候補作とするので、なかには先に他の新人賞を受賞した作品もある。また、既に活躍中の作家の作品も多い。対して太宰賞のようなアマチュアが主な応募者の公募新人賞は、候補作及び受賞作の選定が殊の外むづかしい。候補作に対する初めての公の評価である選評は、応募者の今後の人生設計にも影響を与えかねない。

話を戻すと、加藤の予測は一部当たったが、重要な部分で外れた。今村は受賞後に中短篇を1作書いたのち、しばらく小説が書けなかった。けれども再開後の活躍は目を見張るものがある。紹介した3人の選評をあらためて

再読したが、今でもどの選評も興味深かった。

惜しくも2019年に亡くなった加藤のどのような時でも誠実に素手で立ち向かう論考の数々、たとえば『敗戦後論』や『村上春樹 イエローページ』あるいは『太宰と井伏』などを愛読してきたものとしては、加藤の「小説を書く人は、自分の中に、どこにでもいる、ふつうの、ただの小説の読者をもっていないといけない。なぜならそれがすべてのはじまりだからだ」との指摘は、今村への励ましでもあり深く納得できた。

ちなみに、同じく2005年の太宰賞選考では、加藤は津村記久子のデビュー作「マンイーター」（後に「君は永遠にあいづらより若い」に改題）を誰よりも強く推薦した。加藤は、「この作品に、柄が大きく、しなやかな世界の核心への直接性があることに、強い印象を受けた」と記し、「その筆致にたぐいまれな才能が感じられる」（『太宰治賞2005』筑摩書房2005年）とも書いている。対して小川は4人の選考委員のなかで唯一人、別の作品を推薦した。結果的には2作同時受賞となったが、その後の津村の活躍を見れば、加藤の先見性が際立つ。このように非常に優れた専門家同士でも作品の感受性

は大きく異なるのである。

さて、「むらさきのスカートの女」である。この作品で芥川龍之介賞を受賞し、今村は野間文芸新人賞と三島由紀夫賞を合わせ、5人目の純文学新人賞3冠に輝いた。

芥川賞は9人の選考委員（現在は全員作家）により決定される。講師の方からはその内の小川洋子と高木のぶ子そして堀江敏幸の選評『文藝春秋』2019年9月号）が紹介された。今村の小説のあらずじを追ってもその魅力は伝わらない。どのように感じたかが重要なので、選評により注目したくなる。

小川の「ラスト、（中略）狂気を抜けた哀しさが胸に迫ってきた」ところと堀江の「いびつさをなにか愛しいものに変えていく淡々とした語りの剛腕ぶりに、大きな魅力がある」としたところに特に共感した。

この作品の文庫では、極めて異例だが、新聞や雑誌などに掲載された今村の芥川賞受賞記念エッセイ9本の全てが収められている。今村は出身高校や大学を明らかにしていない。だが、文庫にも掲載されている「今日までのこと」では、生活歴が一部記されている。19歳の時に大学進学のため一人暮らしをしていたが、引きこも

りがちで摂食障害を患っていた。ただしこの時期、中学、高校時代ほとんど読んでいなかった小説をよく読んだという。大学卒業後はアルバイトを転々としていたと書かれているが、文面からは人と関わる仕事が当初は苦痛だったようだ。ホテルの客室清掃が一番長く続き、働くことの楽しさや人と関わることの楽しさを知ったという。「むらさきのスカートの女」の舞台である。その後、執筆を休止していた34歳の時に結婚し、現在、娘との3人家族である。

ただ、このように生活歴を辿っても、今村作品の背景は少し理解できるが魅力の源泉に辿り着くことはできない。

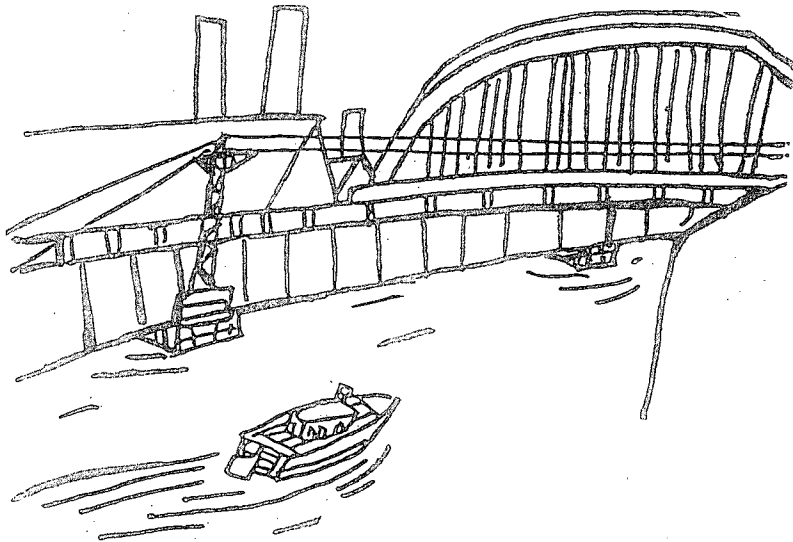
私は、選評に「声」とあえて題名を付けた川上弘美の次の文が新鮮だった。

小説を読むと、作者の声が聞こえてきます。どんな声の質で語るのか。どんな抑揚で。どんなリズムで。どんなピッチで。作品の要請する声を、作者の持つ本来の声とどう練り合わせつくりあげてゆくか、ということに、小説家は精魂をこめます。（中略）作者今村さんの声がほ

んとうによく響いていました。今村さんがつくりあげた、今村さんの声を、惜しむことなく美しく聞かせてくれました。

今村作品に限らず、私は好きな作家の作品を人に上手く説明できないことが多いが、それは作家固有のヴォイスを説明できないからなのだという事に気づいた。

「むらさきのスカートの女」は、「こちらあみ子」が持つ荒々しさは消えて物語としての流れが自然になった。哀しみを滲み出るユーモアで包んでいるので楽しく読むことができる。今村は「こちらあみ子」から確実に一歩も二歩も踏み出しているのである。



不思議な非現実の世界

安部公房『箱男』

岡本 修治

読んでみて、面白い、流石だと感心する一方で、とて

も読みにくく実験的な小説なのだった。箱を被って生活する。箱が生活と一体となる。あちこちに贗箱男が出現する。社会問題となる。こういう世の中を構想し、そういう存在を問題提起している。現代は、匿名の「フィッシュメール」「炎上」「スパムメール」「詐欺師」「なりすまし」「フェイクニュース」等、偽が世の中に氾濫している。この小説はそんなことを予感させてくれるような話に思えた。「見られずに見る、行為」がまさにそれだ。幕末の志士からみれば、なんとという世の中になったのだろうか、驚かれることだろう。「名をなのる」「名前で生きる」これが一番大切だった。それでよかった。それか

らすると、正反対の生き方といえる。

この主人公は何か病んでいるのか「強迫神経症」のために、なにかに「こだわっている」感じがする。そのこだわりが、妄想を産み、ありもしない物語を語っているかのように感じる。最後は、結婚する花婿が、いつのまにか「ショパン」になり、小便をみられて結婚をあきらめるところは「笑ってしまふ」。

最初の出だしからすると、最後の結末は、変なところに行ってしまった、という感じがする。そうすると、例の贗箱男はどうなったんだろう。いつのまにか「ピアノ教師」との結婚みたいなことになって、面白いのだけれど。考えてみると、主人公が外から戻って、彼女が立ち

去るまでの間、結局、ひとことも言葉をかわさなかったわけだ。心残りがなくはない。しかし、この心残りは話し合ったくらいで消えるものではないだろう。言葉が役立ってくれる段階はすでに過ぎ去ってしまっていた。眼を見交わしただけで、すべてが理解できた。完全すぎるものは、崩壊の過程に現れる現象の一つにしか過ぎない。なんどやりなおしても、結局、この場所にもどってくる。箱からでるかわりに、世界を箱に閉じ込めてやる。なるほど、こんなアンチな世界を小説にしたのか、と思った。箱は迷路なのだ。彼女はこの迷路の中にひそんでいることだけは確かなのだ。救急車のサイレンが聞こえてきた。で終わっている。さて、この救急車、どこへ連れていく？

この箱男のように、社会から、孤立、独立していればまだいいんだろう。50年以上前の時代ならそうだろう。今の時代を、安部公房ならどう感じるだろう。匿名をいふことに、恥も外聞もなく、詐欺行為が、公然と行われている社会になり下がっている。私はこの現代を安部公房の眼でキチンと解剖していただきたい、そんな気持ちが湧いてきてしまいました。

ちよつと読後に気づいたことを書かせていただきます。

1 全体構成

書いているぼくと書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって。

この小説全体が、自分と、もう一人の自分との会話。それも、とても嫌なもう一人であると思った。

2 印象に残ったところ

とても面白いと思ったところ「思いがけなく、別の時間を覗き込んだような気分。高台に立って見晴らした鉄道のレール並みにほっそりしたしなやかさだった。ひらけた空のように視線を妨げるものがない、軽くて青みがかった足取り。ぼくは知らずに、彼女の足に武装解除されてしまった。」というあたり。次の言葉も心に残った。

「見ることに愛がある。みられることには憎悪がある」。「裸と肉体とは違う。裸は肉体を材料に、眼という指でこね上げられた作品なのだ。肉体は彼女のものである。でも、裸の所有権については、僕だって指をくわえて引き下がるつもりはない」。

3 主人公の自問自答

この小説、主人公の自問自答、あるいは独白で進んで

いく。このあたりはドストエフスキーを想わせる。例えば、「まあ落ち着けよ。……しかし、たとえばこういう解釈は成り立たないだろうか。……だからと言って、このままあつさり箱を片付けてしまう気にはなれない。それに、はつきり言って、ぼくは不満である。もつとも、箱男という人間の蛹から、どんな生き物が這い出してくるのやら、ぼくにだってさっぱり分からない。箱の窓を縁にして覗いたとたん、すっかり様子が違ってしまう。風景のあらゆる細部が、均質になり、同格の意味をおびてくる。タバコの吸い殻も、……マンホールの蓋も。それはそうと、あの庭に面した窓の明かりは、なんだろう。」というあたり。

箱男にとって、社会との接点は、窓から覗くこと。

彼女に会いに行つて、ひそかに願っていた、彼女の裸を覗くことが実現され、自分はそれを望んでいたことに気づく。逃げたがっているような気もするし、追いかけてがっているような気もする。

喉がからからになっている。裸と肉体とは違う。裸は肉体を材料に、眼という指で捏ね上げられた作品なのだ。肉体は彼女のものであっても、裸の所有権については、

ぼくだって指をくわえて引退るつもりはない。

4 写真は安部公房が撮っている（つまり作品の一部）。いまひとつよくわからなかった。

5 比喩（これが非常に多く使われている）

比喩が多くて楽しめました。列挙してみます。

鋼鉄の巻き尺のように／横隔膜が濡れ草のように／ぼくの顔は熟れすぎたメロンのように／うどんでもすすり込むような／糊をはがすような音／めまいのような身の軽さ／下着を濡らしたようなすり足で／玩具のロボットのようないちよち歩きで行き来しているぼくの影／巻貝の内側のような窪みがちらついた／大粒の雫を降らせ、箱を太鼓のようにひびかせた／まるでニトログリセリンを欲しがっている狭心の患者みたいな騒ぎ／皮膚病のような側面の盛り上がり／箱の内側には、粘土で押し付けた手型のように、かつての住人の生活の跡が／手帳は湿気たビスケットののように、指の間でぼろぼろとくだけ落ちた／墜落するエレベーターのような深い黒／世界つてのは、沸きっぱなしの薬缶みたいなものさ／義眼のように見開かれたままである／誤差をふくめて予測可能なライフルの軌道をよむように／しか

しこの理性も、満ち潮に洗われはじめた海岸の砂のように脆く、はかない／開き気味に投げ出された両脚は、毛が薄く、皮をむいた生いかにように湿っている／唇が厚いゴムの弁のように振動する／踊り子のタイツのようににきらめいている／落葉松の若木のように、冬の臭いが良く似合う／ぷつぷつ魚の卵をつぶすような音に変わる／息をとめられた汗腺が、涸れた浅瀬の貝のように舌を出してあえいでいる／夏ミカンをわったような湿っぽい音をたてて／世界は永遠に続く土曜日の夜の始まりのようなやさしさに満ちている／覗きの衝動は原色のペンキのように、彼のためらいをべったり塗り込めてしまっていた／全身が火照って、息が笛のような音をたてる／圧力で頭蓋骨の蓋が開き、眼球がコルク弾のように飛び出してしまいうさだ／もったいぶったピアノのリズムが、神経痛のように膝の関節を撃つ／乗り込んで行って、ピアノをぶち壊してやりたいような衝動にかられていた／彼は口を開けっぱなしにして、全身をポンプのようにはずませた／息もたえだえに、こよりの先にぶら下がってふるえている、赤い線香花火の燃えかすのようだと思う／ふんわりとした絹の旗が風になびいてい

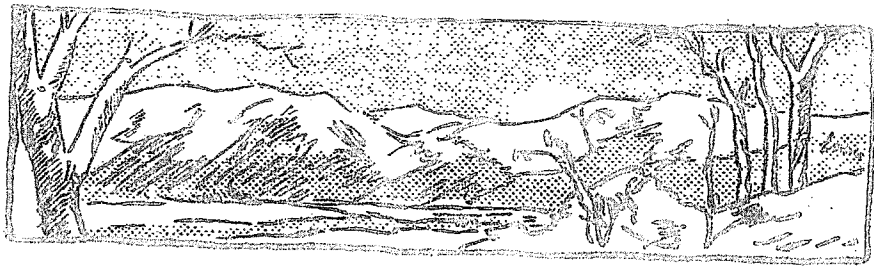
るようでもあった／単に音がしないだけでなく、物質のような静寂がうずくまっているのだ／彼の内臓は、夜明けの砂浜のように、一瞬のうちに干上がってしまった／鳥の糞のような涙を流しているコンクリートの壁に挟まれて。

6 レトリック等（心に残るレトリックが多かった）

比喻とおなじようにレトリックが巧みで、楽しめた。私の感じたところを列挙させていただきます。

タバコをもみ消しながら、彼女は頭をゆすり、空いている方の小指で耳の穴を掻いた。（よく見て写生しているが、よくもまあ、こんな表現を挿入したものだ。）／宝探してもしているみたいな目つきだった。／疑わしげに歯を見せて、口だけで笑うと、意地っ張りの子供の顔になった。／そしてこの箱の残骸は、蝶になつて飛び立った。／蛹の殻かもしれないのだ。／充滿した寝不足が、血をにじませながら脈打っている。／波は定規でひいたような平行線で、沖に向かってしだいに幅を狭めながら無限に続いている。波は一つおきに、裏と表があり、表の方がわずかに艶やかだ。／君なら、降りたての雪の上を歩いたって、足跡を残さずに逃げ切れるよ。／乞食に風邪を

ひかせる雨の色……地下街のシャッターが下りる時
その間の色……質流れになった卒業記念の時計の色……
：台所のステンレスの流し台の上で碎けている嫉妬の
色……失業して迎える最初の朝の色……役に立たなくな
った身分証明書のインクの色……自殺志願者が買う最
後の映画の切符の色……その他、匿名、冬眠、安楽死、
そうした強アルカリ性の時間に腐蝕された穴の色。／だ
が、断るまでもなく、すべての遺書が額面どおり、つね
に真実を告白するものだと決まっていなかった。死んでい
くものには、生き残る連中には分らない、やつかみも
あれば嫉妬もある。なかには「真相」という空手形に対
するうらみが骨身に徹していて、せめて棺桶の蓋くらい
は「嘘」の釘で止めてやろうという、ひねくれ者だっ
ているはずだ。ただ遺書だというだけで鵜呑みにするわけ
にはいかないのである。



安部公房著『箱男』を読む

―仕掛けられた迷路への旅―

関 美智子

一、はじめに

二〇二三年の春、私はこの小説を文学全集で二回読んだ。一回目は素読。二回目はゆっくり読んだが、難解であった。まず、目次なし、章立てなしで、書き出しは新聞記事のタイトルとその文章で始まり、挿入文あり、写真入りの文章あり、途中で文章が止まったまま、次の文章へと移行していく。今までに体験したことのない小説の構造であった。この小説は推理小説か探偵小説かと想像したが……。そうではないらしい。

そこで先ず自分なりに《 》のついた最初の文章を抜粋して章立てに。

二、章立て作成

すると文章の中に埋まっていた文字が立体化し、24章となつて、左記の通り、全体像が見えてきた。これをあらすじに置き換えるとする。

1《上野の浮浪者一掃けさの取り締り 百八十人逮捕》P.6

2《ぼくの場合》P.7

3《箱の製法》P.8

4《たとえばAの場合》P.14

5《安全装置を とりあえず》P.24

6《表紙裏に貼付した証拠写真についての二・三の補足》

P.40

7《行き倒れ 十万人の黙殺》P.50

8《それから何度かぼくは居眠りをした》P.52

9 《約束は履行され 箱の代金五万円といっしょに 一

通の手紙が橋の上から投げ落された。つい五分ほど前のことである。その手紙をここに貼付しておく。》 P.58

10 《……………》 P.59

11 《鏡の中から》 P.65

12 《別紙による三ページ半の挿入文》 P.83

13 《書いているばくと 書かれているばくとの不機嫌な

関係をめぐって》 P.92

14 《供述書》 P.149

15 《Cの場合》 P.152

16 《続・供述書》 P.160

17 《死刑執行人に罪はない》 P.169

18 《ここに再び そして最後の挿入文》 P.184

19 《Dの場合》 P.193

20 《……………》 P.209

21 《夢のなかでは箱男も箱を脱いでしまっている。箱暮らしを始める前の夢をみているのだろうか。それとも、箱を出た後の生活を夢みているのだろうか…》 P.214

22 《開幕五分前》 P.222

23 《そして開幕のベルも聞かずに劇は終わった》 P.226

24 《……………》 P.234

以上、長い章立てとなってしまったが、全体像が浮きぼりになり、明確化したと思う。

そして、24の中には次のような気にかかった文章があったので、ここに明記する。

ー 大事な補足はもう一つだけ。落書きのための余白をじゅうぶんに確保しておくことである。

ー 箱というやつは、見掛けはまったく単純なただの直方体にすぎないが、内側から眺めると、百の知恵の輪をつなぎ合わせたような迷路なのだ。もがけば、もがくほど、箱は体から生え出たもう一枚の外皮のように、その迷路に新しい節をつくって、ますます中の仕組みをもつれさせてしまう。

ー 手掛かりが多ければ、真相もその手掛かりの数だけ存在していいわけだ。

救急車のサイレンが聞こえてきた。で完。

読了後、阿部公房の他の長編を読みたい衝動に駆られ、次の二冊の本を選んだ。

一、『壁』・『他人の顔』を読む

一冊目『壁』（戦後文学賞・芥川賞受賞）の内容は突然

自分の名前を喪失した男が、他の人との接触到支障を来し、人形やラクダに奇妙な友情を抱く。独特な愚意にみちた野心作。この作品の「序」に著者の師である石川淳は彼のことを「安部公房君が椅子から立ちあがって、チョークをとって壁に面をかけたのです。安部君の手に従って、壁に世界がひらかれる。ここから人間の生活が始まるのでということ、世界に承認させられる。諸君がつれ出されてゆく先は、諸君自らの生活の可能性なのです。この世界は諸君の精神をつかんではなさない。というのは、そこに諸君の運命が具象化されているからです。精神の生活はここに安部君のチョーク的に必然の形態形式を取る。それが現実の生活と相似の形態に固定していないのは、安部君が精神の運動に表現を与えているからです。この形式に於いて、この仕事は、現実の生活上普遍的な意味をもつ。すなわち世界観が出来上がる（Ⅱ発見）。あきらめるということを知らない精神では発見は出来ない。人は導かれて壁の世界に入ると、この扉をあければ、壁の上にひらかれた安部君の世界が諸君の運がついそこにあるから、諸君みずからの手をもって扉をあけて下さい。」と。

師は安部君の世界へと誘う。うらやましいほどの師弟関係。

二冊目は『他人の顔』 内容はケロイド癍痕を隠し、妻の愛を取り戻すために、他人の顔をプラスチックの仮面に仕立てた男。…人間存在の不安を追求した異色長編小説。三島由紀夫は『作中で主人公が、仮面の作製と完成途中で。』『芸術的昂奮』『戦慄的な陶酔を語る部分が美しい。』と。評している。

三、安部公房の文学とは

安部作品は、海外でも高く評価され、世界30数か国で翻訳出版されている。晩年はノーベル文学賞の有力候補と目されていた。受けた賞は数多。幻想文学にとどまらず、スリップストリームやメタフィクションといったポストモダン文学に顕著な技法を実践し、推し進めた前衛文学者として評価が高い。

作家の大江健三郎は安部公房のことを次のように語っている。

『戦後作家のうち、最上の短編小説技術をそなえた作家。その構成力の卓抜さは、もつとも未来的な作品に、ほとんど古典的な完成度をあたえている。ところが長編小説

は構成への配慮をみずから拒否し、バランスをつき崩して、その作品と読者とを、不安な宙ぶらりんの状態に放り出してしまうことがしばしばある。その不安な宙ぶらりんの状態におちいることによって、はじめて安部公房の世界に入り込む準備を終えたのであると。そして再読することによって、バランスの欠落と感じられたところのものが、周到に構成された方向づけを確実にうけとめて、小説の進行の流れを、いちどに逆流させる転向点が設定されていることに気づく。安部公房のスタイルは精妙に考えぬかれた論理の鎖をくりひろげてゆくところにその基本的な体質がある。安部公房は、信じがたいほどの努力を重ねて、このような形式と内容をもつ、困難きわまりない長編小説の製作をなしとげ、また新たに困難な課題に向って、勤勉な沈黙をつづけているのである。』と。

四、『箱男』を読んだ感想

(一)、今まで読んだことのない語彙と比喻の文章と写真との構成力、それに『箱男』の構造が画期的な新しさを秘めている点である。

写真の説明文で印象に残った文章を列举する。

①―操車掛は、線路の上にダンボールの紙箱が落ちて
いるのを見つけて、首を傾げた。箱が歩きだした。(P.34)
②―ダンボールの壁：一面に小さく書き込まれた、ボ
ルペンの落書―(P.35)

③見ることには愛があるが、見られることには憎悪がある。見られる傷みに耐えようとして、人は歯をむくのだ。―見られたものが見返せば、こんどは見ていた者が
見られる側にまわってしまうのだ。(P.36)

④小さなものを見つめていると、生きていてもいいと
思う。―大きすぎるものを眺めていると、死んでしま
い
たくなる―(P.197)

⑤ここは箱男の街。匿名が市民の義務となり、―登録
されたというそのことによって、裁かれるのだ。(P.199)

(二)、言葉の反語が多い。

みるもの・みられるもの、覗くもの・覗かれるもの、
ほんもの・にせものなど

(三)、仕掛けられたトリックがあり、読者をその世界
へと誘導する。

記述者が多数いるように書かれているが、迷路を旅し
た結果、私の見解では一人を限定したのだが、どうだろ

うか。

(四)、著者の自己解説が多く、それが小説をさらに難解にさせた。不断読書する時には、頭の体操せずに自由自在に読んでいた。この小説では存分に頭の体操をしながら迷路を何回か往復した。著者が原稿の十倍位の原稿原紙を反故にしたという。この小説は著者の熱エネルギーが伝わり、すばらしいと思う。存分楽しんだ。

※安部公房は、ナイシー・S・ハーディンによるインタビューの中で『箱男』の構造について、次のように述べているので添える。

①『箱男』が型破りの小説であること。

②独特の構造をもち、トリックも沢山仕掛けていること。しかもそれが理解されているとは考えられない。たとえ注意深い読者であつても。と。

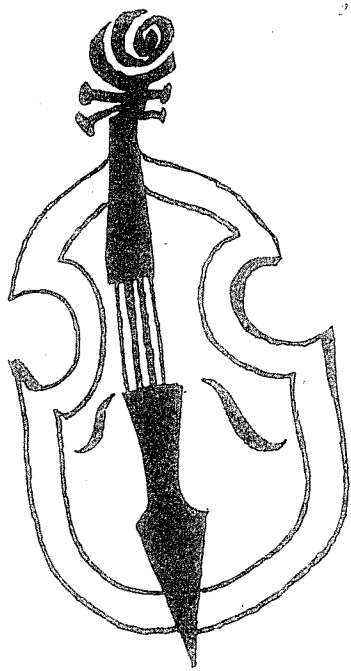
③大ざっぱにいつてこの小説は、サスペンスドラマなしいし探偵小説と同じ構造である。と。私の目立てもまちがいではないらしい。

五、その他

昨年(二〇二三)は安部公房没後三十年にブッククラブの仲間と共に『箱男』を読み、講師の解説を拝聴出来

たことは光栄であつた。今年(二〇二四)三月七日は安部公房生誕一〇〇周年記念を迎える。そして『箱男』は石井岳龍監督の手で、今年二月にドイツ・ベルリン映画祭のベルリナーレ・スペシャル部門に招待された。公開されたら是非鑑賞してみたい。

『箱男』には軽さとユーモアと、エロティシズムの悲哀が絶妙に配合されている。それらをどう表現されるのか、今から楽しみにしている。



『約束された移動』——名も無い人に光を当てる——

東 健太郎

小川洋子の小説は、18年前に『博士の愛した数式』を読んだ以来です。本作は3回読みました。1回目良かったと思ったのがそうでもなかったり、その逆があったりするのです、やはり最低2回は読むべきだと思いました。例によって10段階評価をすると、良かった順に9点が「黒子羊はどこへ」、「ダイアナとバーバラ」、「巨人の接待」、8点が「寄生」、7点が「約束された移動」、「元迷子係の黒目」となりました。平均点は8.17点で、高得点と言えます。透徹した文章の美しさは比類無いです。では、個別に見ていきます。

「黒子羊はどこへ」

これは傑作だと思います。この作品だけ際だって格調

が高く、最も物語的です。舞台は日本とは思えず、何となくスペインあたりを思い浮かべました。二頭の羊が流れ着くところから始まり、その両親から黒子羊が生まれ、その子羊を見に子供が集まり、もともと子供好きだった女は託児所の園長となります。子供たちが園長の膝の上に乗る偉人伝を音読し、窓の外で黒子羊が聞いているという、これ以上無いような幸せな描写が続き、こちらも幸せになつてしまいます。

いつしか時は過ぎ、「黒子羊の死に方」の話で園児が一番好き、という話になります。

死に方にはいろんなバリエーションがあるので。そして、黒子羊は実際に死にます。p192に《のびすぎた自分の角に首を絞められて死んでいたのです》とありま

す。これはたぶんどんなバリエーションにも無かった死に方だったのでしょう。そして園長もナイトクラブへ行った帰りに運河に落ちて死にます。そこに通うのには理由があったのです。その理由がまたいいです。かつての園児の歌声を排気口から聞けたためなのですが、まるで母が息子の活躍を陰から覗いて応援しているようにも感じました。

そして、子供たちを先頭にした葬儀の列は黒子羊に導かれるというところで終わります。

ところで、この黒子羊ですが、p195「死者は閉じた目で、生き残ったものは伏せた目でまぶたの向こうに透ける黒色を目印にしてそれについて行く。」「それでも、閉じられた死者のまぶたには、一点の曇りもない黒色で全身を満たした一頭の黒子羊が、くつきりと浮かび上がっている。」とありますが、黒子羊は上述したようにすでに死んでいるので、幻として現れて、葬列の皆を案内している、ということでしょう。

何から何まで素晴らしいですが、「黒子羊はどこへ」というタイトルがまたいいです。短編集のタイトルはむしろこれにすべきだったのでは、とも思いました。

また、本作は物語性が強く、何か作者の傑作長編「ことり」を思わせる雰囲気があるようにも感じました。

「ダイアナとバーバラ」

ユーモアもあり、なんとも言えない面白さがあります。病院の案内係バーバラの名前の由来もおかしいですが、少女時代、エスカレーターの補助員をやっていたということになっています。エスカレーター導入当初、実際こういう人がいたのかどうか知りませんが、こういう設定を思いつくところがさすがです。さらに笑えるのは、友だちを空港の乗り継ぎ補助員の少年としたことです。これは明らかに架空の職業でしょうが、仕事の内容ももっともらしく、作者はよく考えつくなど感心してしまいました。

幼少の時から今に至るまでひっそりと人の記憶には残らないが役に立つ仕事をしてきたバーバラは、ダイアナ妃にあこがれ、言い方、服装も真似るようになります。この短編集の女性主人公は目立たない仕事の傍ら何かに熱中するケースが多く、その熱中度合いが甚だしいのがこのバーバラです。服を作っていく際出てくる用語はよくわからないものもありますが、その熱心さは読者で

ある私にも伝わります。こんなに熱中できるものがあつたら人生最高だな、とも思います。社会の片隅にいる人でもそんな人は魅力的なので、世間がどう見ようと、孫に慕われその成果を認めてくれる少年も現れるので、幸せな人生だと言えるでしょう。

「巨人の接待」

そこはかたないユーモアがあり、文章に気品もあり、素晴らしいです。どうしたらこんなに美しい文章を書けるのでしょうか？

本作でも、主人公の「私」は目立たない通訳という仕事に携わっているわけですが、通訳相手の作家「巨人」の立場を思いやるあまり、返答の捏造をしてしまうわけです。

本来、通訳が最もしてはいけないことなのかも知れませんが、それが実は最も職務に忠実な行為ではないか、という逆説的な問いかけを含んでいるところが実に面白いです。そして、その行為は「巨人」への一種の愛と言える類いのものかも知れません。

この短編もあらかじめ構成が決まっていたわけではなく、作者が外国の作家の来日の状況を目の当たりにす

る機会があつたのと、自分が野鳥公園を訪れた体験が重ながつたのでしょうか。でも、そこからこんな美しい話を生み出せる人が他にいるのでしょうか？

「寄生」

ユーモラスかつ不穏で不条理なイメージに満ちています。作者の奇想力とでも呼ぶべきものには感嘆するしかありません。

寄生虫博物館で展示物を見たことから発想したのでしようが、そこから路上で老女が青年にいきなりしがみつくとか、誰がそんな話を考えつくのでしょうか？

藤野可織の短編「マイハート・イズ・ユアーズ」は、「私」が夫と結ばれると夫が癒着し一体となり、妊娠するという話ですが、これはヒレナガチョウチンアンコウなどの生態を人間に移し替えただけです。この生態を知れば、女性作家なら、「これなら楽で私でも産める、人間に置き換えた話を書こう」となるのは想定内と言えます。本作における奇想は藤野可織の比ではありません。Δでもこういう発想は出てこないでしょう。

寄生虫はp154に《相手の都合など考慮せず、音もなく忍び寄り、》とありますが、「相手の都合」をプロポー

ズ直前としたセンスがまた最高です。

「約束された移動」

これは推し活肯定の物語でしょう。その点では「ダイアナとバーバラ」と共通する部分があります。

ホテルの室内係の「私」にとって、ハリウッド俳優Bはスイートルームに泊まったことが縁で「推し」になりました。そうなる、「推し」のやることすべてに興味を持つようになります。

注意してみると、本が1冊無くなっていることに気がつきます。しかも、無くなった本には、内容に移動に関することが含まれていることを後に発見するのです。

これ以降の展開は、作者の作為が前面に出てきてしまつて、不自然さを感じてしまいました。

デビュー作におけるBの移動シーンは「私」の最も気に入っているシーンであるが、Bの心にも残ることにさせよう。だから、来日時、Bはスイートルームの書棚から移動に関する本を引き抜くのだ、と作者は考えたのだと思います。その思考は強引すぎるでしょう。

まず第1に、俳優Bは、デビュー作に移動するシーンがあったからといって「移動」に興味を持つとは限らな

いでしょう。普通は持たないと思います。

第2に移動に興味を持ったからといって、スイートルームの書棚から本の内容を吟味して、毎回移動に関する本を引き抜くなんてことはしないでしょう。

第1と第2を掛け合わせると非常に低い確率になります。Bの人物設定に無理があることの証明になりますか？

さて、異変に気づいた「私」は、その無くなった本を割り出し、購入し読みました。その本は文芸書から推理小説、絵本と多岐にわたりました。「移動」に関して自分でも深く考えるということではなく、「推し」と同じ本を読むことに喜びと幸せを感じたのだと思います。

ですから、ガルシア・マルケスとかコンラッドとかスタインベックとかはダシに使われているだけなので、個々の作品を考察してそのつながりを読み解くなどということをする必要は無いと思われます。

しかし、推し活が生きがいになるというのはいいですが、積極的に生きるバーバラと違い、受動の極みの「私」の姿勢では、過去にBと一緒に時間差で何冊かの本を読んだ美しい思い出を反芻するぐらいしかできないはず

です。そんなことで本当に幸せになれるのでしょうか？

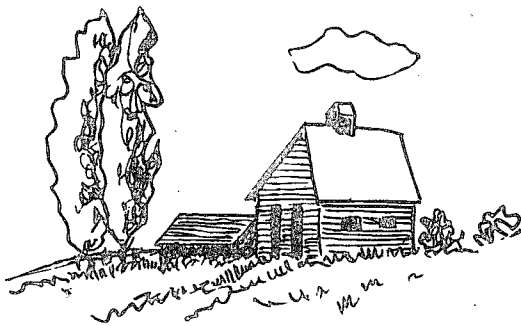
「元迷子係の黒目」

途中で悲劇が起こり、その後救済されるという構成を取っており、その点で他の作品との違いを感じます。悲劇の後にユーモラスな展開になりますが、普通はなかなかそのような持つて行けないでしょう。さすが小川洋子です。

ただ、全編、「末の妹」が斜視で、だから視野が広いということが前提で話が展開します。元迷子係という設定もそこから来ているわけです。

斜視だから視野が広い、というのはあまりに安易な発想のような気がしたので、本当にそうなのか調べて見ました。結果、生まれつき斜視の人は一方の目を使わず片目だけで見ているので、視野は狭くなるそうです。斜視の人は視野が狭いことに苦しんでいるのに、本作は偏見を助長することになる弊があると思います。

小川洋子は、科学的なことに關してはよく取材してから書く、と聞いたことがあります。本作を書くに当たっては取材しなかったのでしょうか？残念です。



日の当たらない人たちへの優しい眼差し

小川洋子 『約束された移動』

岡本 修治

読ませてもらって、なんとなく不思議な印象が残ったけれど、「助けを必要とする不特定多数のたった一人のための仕事」、と最後に藤野可織が解説に書いているので、全体が括られた。なるほど、そういうことかと謎解きみたいになんて思いました。

私は小川洋子について『博士が愛した数式』と短編を数作読んだだけでした。今回のを読んで、「気品があり」「淀みがなく」「レトリックの技術が各段に進歩され」すばらしい、と思いました。以前の短編はいわゆる「物語小説」だったので、今回のとは違っていた。ただし、ちよつと難解。私はこの作品集の中では『約束された移動』それに『巨人の接待』がよかつ

た。というか分かりやすかつた。他のは、テーマがいまだによくわからない。しかし、日の当たらない仕事をする人たちに優しい眼差しを投げかけているのはよくわかりました。

個々について、ひとこと感想を述べます。

『約束された移動』

上手いものだ。想像力を駆使する。語り手がいる。そして、その情景から想像する。その演じる相手になりきって書いてみる。『約束された移動』、はそういう書き方だ。毎回、スイートルームに泊まる。一冊本がなくなる。はなやかな俳優のBなのに、本は暗い。ホテルの客室係が主人公。毎回Bがやってきて、一冊

ずつ、抜き取っていく、という発想はありふれているが、それを物語りにしていく力量は並外れている。これが、一番よかった。

『ダイアナとバーバラ』

長い間あやふやだった遠い昔の自分に、今ようやく的確な名称が与えられ、すっきりとしたとでもいうように、バーバラは紙コップの底でテールを小さく叩いた。エスカレーター補助員の話は、ことがらが微分されて面白かった。ただそれだけ。話自体はよくわからなかった。最後にバーバラが孫娘に春休みの宿題すんだか、と聞く。これ日本だよねと思う。

『元迷子係の黒目』

「ママの大叔父さんのお嫁さんの弟が養子にいった先の末の妹」というフレーズをキチンと全部というのがミソ。それから、「その瞬間、彼らは一人ぼっちの迷子ではなくなる。」がいい。やさしい眼差しだ。子供達は守られているのに、自分の子供達（熱帯魚）は戻ってこない。一体どういうメタファなんだろう。

『寄生』

作者はこういう作品を書いてみたかったのだろう。

しかし、私にはわからない。彼女がずっと待っていた理由。老女が間違えた理由。

『黒子羊はどこへ』

不思議なトーン。ご都合主義満載。海から難をのがれた羊はびしょ濡れなのに交尾するだろうか。目が離れている、世界を眺めるのに不自由だろうと同情するほどだった。誰も同情はしない。

いつの間にか貿易船はばらばらになり、波に飲まれて姿を消していた。せん毛には申し分のない清々しい空が広がっていた。なぜ申し分がない？ 急にJがでてきて、排気口の上で歌を聞く園長。だいたい村に、ナイトクラブなんかあるわけがない、などと思うのだけれど、そんなことはお構いなく、どんどん話を進める。一体、黒子羊と」と園長 どう決着するのだろう？

この黒子羊は一体何の象徴なのだろう。何の比喩なんだろう、と思ってしまう。死者にふさわしい場所。よくわからない作品だ。「ある日」というのが印象的だった。

『巨人の接待』

最初、読売巨人軍かとおもったが、世界的に有名な作家の通訳の話だとすぐにわかる。この作品、作家と通訳の以心伝心みたいな心の伝達があり、この作家がおそらくユダヤ人で大戦中に隔離された経験があり、そのために小鳥を飼っている。それが伝わってくる。この作家の苦しみが態度で伝わってくる。何も言わなくても、小鳥をなぜ愛するのか、ただその悲しみを生きている、そんな風を感じた。



『子供が子供でなくなる』

―『約束された移動』感想記―

武内 法行

小さな文庫本の中に、六篇の作品が収められてゐる。

正月明けから十日ほどかけて全篇を通読した。ほとんどの作品は女性が主人公で、しかも中年以後の、容姿経歴共に余りぱつとしない女性たちである。

ホテルの客室清掃係、病院の案内係、元デパートの迷子係、寡婦あがりの託児所の園長等々―いはば世間的には、さして陽の当たらぬ職種の人たちばかりである。

かうした普段注目されることのない、しかも初老の女性の仕事やその内容を取り上げてゐることに、返つて興味を引かれる。七十代の私にとつても、まるで知らない世界であり、それを通しての彼女たちの心情が記されてゐるからである。

著者は、かうした職業に関はつたことがあるのだろうか？ それとも現場の取材を通して具体的なことを知つたのだらうか？と思ふ。

恐らく作者自身がさうなのではと思はれるのは、書物に対する興味である。『約束された移動』にも『ダイアナとバーバラ』にも本への偏愛が出てくる。本は彼女たちにとつての「秘密の花園」であらうか。

その一方、他人への協調性のなさや友人の乏しさの記述（『元迷子係の黒目』）も出てくるから、世渡りに疎いタイプの性格が顔を出してゐるのか、とも思へる。

このやうに老いが近づき、仕事も家庭も世の晴れがま

しさとは縁遠い女性が心通はず相手は、子供である。

バーバラなる「ばあば」は、孫娘がよく訪ねて来るし、離婚暦のある「元迷子係」は、遠縁の少女が始終顔を出し、ときに行動も共にするのである。黒子羊を飼ふ寡婦は、託児所の園長となり、日々幼児と触れ合つてゐる。

彼女たちに共通するのは、通常の大人は気づかぬが、子供だけに感じられるオーラを発してゐて、子供の世界と一体化することが出来る能力である。時には、大人や老人もふつと気づいて彼女たちを信頼するやうな、優しさでもある。

かうした眼にみえぬ資質は、女性にしばしば見られるもので、隠れた才能とも云ひ得るものであらう。知性重視の社会の中で、このやうな一面が本当は大事なのではないと思ふことがあるが、作者は、さうしたところに眼が行き届く人であるやうだ。

かうして全六篇を概ね感心して読んだのだが、時々首をかしげる箇所もあつた。

講座の参加者からも指摘があつたが、ハリウッド俳優Bに抜き取られた本は英語版の筈である。客室係もその

本を買つて読むと云ふくだりは、同じ英語の本とすると不自然に感じられる。恐らく代りに邦訳本を読んだのであらうが、それについては何も書かれてゐない。

また、欧米の有名俳優ならチェックアウトの際、チップを置いて行くのが常識であらうが、それにも触れてゐない。

『黒子羊：』では、園長が園児に音読させる偉人伝は文章が高度で、どうみても小学生レベルである。仮名がやつと読める幼児のものではない。

更に、この園長はかつての園児Jの歌を聴きに村のナイトクラブに行くところがあるが、都会ならともかく村びと相手のナイトクラブ！といふものがあるのだらうか？ゴミ箱の上に座つて換気口からmeler歌声を聴くといふのも、随分不自然である。

以上のやうな疑問点はあつたが、なだらかで読み易い文章の流れに乗つてさほど引つかかりなく読めてしまふ：と思つてゐたら、これらはリアリズム小説ではなく、童話とか説話の要素が入つた作品の由、小平先生の解説を聴いて、さうなのかと得心する。

そして、サービスやケア業務の現実をも含みながらの

メルヘンとすれば、作品のふくらみや自由度も上り、平凡な題材であつても魅力が増すのかもしれない、と思ふ。そこに一読者の私も取り込まれたやうである。勿論作家の力量があつての話であらうが――。

それにしても、女性である作者の眼を通すと、こんな小さなもの、さりげないものの世界が生き生きと浮かび上がつて来るのか、と感心する。そこには、子供、特に幼児への慈しみがあるやうだ。

私などは、独身の頃はどちらかといふと子供嫌いで、小さい子はただうるさく煩はしいとばかり思つてゐた。従つて、見知らぬ幼児であつても関心を持ち夢中になつてあやしたりする人を見ると、不思議な氣がしたものである。

それが變つたのは、自分の子を持つてからである。

わが子が可愛いといふのは、普通に子供が可愛いといふのとは、違つたものであつた。もつと切実な、他に代へ難い生命(いのち)への愛着とでもいふものであらうか。ともあれ、それからは人並みに親馬鹿となり、その成長の様子に心奪はれた。かなりの泣き声にも耐性が出来

た。女の子の場合はより愛嬌があり、その挙動は大げさではあるが、見てゐて天使のやうに思へた。

清少納言の『枕草子』に、「うつくしきもの」といふ章がある。古語の「うつくし」は「可愛い」の意味ださうだが、読んでみると、様々なものへの細やかな目配りを感ずる。

小鳥の雛や小植物への言及もあるが、とりわけ幼児のしぐさや寝姿についての記述が具体的に楽しい。

をかしげなるちこの、……かいつきて寝たる、いとらうたし(可愛い幼児が、……しがみついたまま寝たのは、本当に愛らしい)。そして、

「何も何もちひさきものはみなうつくし」とは、彼女のひとつの結論であつたやうだ。

この作品群でも女主人公を通しての「ちひさきもの」への愛情が打出されてゐると思ふ。しかし、そのちひさきものは成長し、大きくなつてしまふのである。

子供は子供でなくなり、天使は天使でなくなつてしまふ。その境界を作者は、「ある日」の訪れ(『黒子羊はど

こへ』と記す。

それでも、親ならば毎日の子供の成長を喜ぶといふこともあらうが、自分の子でない幼児の世界と強く結びついてゐる人はどうなのだらうか？

村人に忌避される黒子羊を出生時から育て、それを中心に集まる園児のみを相手に暮し、歌手Jに元園児の面影を探す園長は、世間離れたファンタジーの世界に住んでゐる人だつたのだらう。

しかし、黒子羊の寿命が尽き、Jの歌声からも遮断される「ある日」の訪れは、そのファンタジーの破綻であり終りであつた。

普通の市井人である私などには、平凡ながら子供を持ち更に孫も持つことで精神の安定を得る、といふ心持が確かにあると思ふ。幼少の孫たちは生命力の塊で、日々それを失なつて行く自分たちの衰退を補ひ、一家全体のバランスを取るやうに思はれるのである。

老人と孫ないし老女と少女、また身内でなくとも寡婦と幼児の組合せは、さうしたバランスを支へるかたちではないだらうか。

しかし、子供といふのはすぐ成長してしまふものである。

そして、「子供が子供でなくなる」と、「うつくしきもの」も消えてしまふのである。

恐らく、あの、外界に対しほとんど何の判断も持たぬ幼児期の純な無邪気さは、「ある日」を境にその子の上にもう訪れぬものであつた。

かうした幼児ではないものの、最初の『約束された移動』の俳優Bにも、十代のデビューの頃は無垢で純粋な子供に通ふ美しさがあつたのだらう。客室係は、それを何よりのものとして胸に刻んだのである。

けれども、その天使は年を経ると墮天使となり、翼を失つたのだつた。もう二度と初出の輝きは戻つて来ないのである。

さうであつても、客室係は、行くべき所に向かつて進んでゐるであらう俳優B本来の美質を探さうとし、彼への思ひを止めない―Bが持ち去つた本の中に、彼の変らぬ魂の彷徨を探すのである。

彼の心の移動は、旧約聖書にもあるやうな、目的地に

着くためといふよりは、移動自体が人生であり祝福されるやうなもの（小平先生）であつた。恐らく客室係はそれを感じてゐたのである。

Bと共に最初の本が消えた日以来、彼女はその本の題名を突き止めて買つて読み、彼の心を共有しようとする。そしてその秘密めいた行為が、生きがひとなる。このやうに拡大されたファン心理の深部には、どこか遠くて手の届かぬ夢への、その人独自の愛惜があるのであらう。作者はそこに――余り恵まれてゐるとは云へぬ客室係の仕事と人生に、意味と慰撫を与へやうとした様に思ふ。



2023年度の文学散歩は、矢野さんが入念な下調べを重ね練ってくれた「早稲田・神楽坂を巡る」プランにて、10月21日（土）＜先負、上弦の前日、曇＞参加者14名で実施された。4年ぶりにランチ込みの1日コースで、しかも、ランチのお店は紅野謙介先生、金井景子先生の「ごはん屋たまり」とくれば、一同行がおうにも楽しみは倍増する。

東京メトロ東西線早稲田駅から早稲田大学へ。初めての訪問に弾む心持ちで南門より



キャンパスに一步入ると、気分も若やぐ。立て看板、建物群、行き交う人々、道沿いのイチョウやヒマラヤ杉へと視線を動かしながらキャンパスの空気を満喫し、會津八一記念博物館、早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）、演劇博物館と見学する。會津八一は、長らく「歌人」として心にあり、例えば、「はつなつのかぜとなりぬとみほとけはをゆびのうれにほのしらすらし」など、歌から醸し出される詩情的世界に

惹かれていた。ただし會津八一記念博物館は會津の作品ではなくコレクションを展示する博物館であった。村上春樹ライブラリーは、ファサードを目にして脳裏に隈研吾が浮かび昨年の文学散歩がよぎった。館内は白一色の内装とガラスの間仕切りが相まって光に満ちあふれ、村上春樹ワールドを存分に体感できる。演劇博物館は、イギリス エリザベス朝時代の劇場フォーチュン座を模して造らており、その外観の前にたたずむと、まるで劇場のなかに身を置いたような……稀有な空間。そして中に入ると、その展示内容の幅の広さ、濃さに圧倒される。建物横に建立された坪内逍遙博士胸像の歌碑には、「むかしびとこゑもほがらにたくうちてとかししおもわみえきたるかも秋艸道人」と會津の歌が刻まれていた。坪内逍遙は會津八一の恩師でもあった。いずれにせよ、3館ともゆっくり、じっくり趣くまに過せたら、足繁く通えたら……と思わせた。



いよいよ、本日のメインイベントともいえる「ごはん屋たまり」へ移動する道すがら、ガウディを思わせる人目を引くビルを見かける。津田さんがすかさず熱心に写真に収めていた。後日、検索すると「ドラード早稲田」という建物で1階はギャラリーや美容室、2階から上は分譲マンションらしい。このような思いがけない発見も散歩の楽しみである。

「ごはん屋たまり」のおもてなしは最高だった。しっとり落ち着く店内で、丁寧にいれられた緑茶から始まり、厳選された食材で饗される食事、紅野先生をはじめ個性光るスタッフからサービスされるランチタイムは贅沢の極みで、何より、みな紅野先生との再会がうれしく、お話も尽きなかった。



その後、漱石山房記念館を見学し、神楽坂散策へ。民家も立ち並ぶ界限も通ったが、住人がいなくなって久しいと思われる家もあり、ドキリとした。赤城神社、善国寺（毘沙門天）とめぐる。赤城神社は、境内に分譲マンションが建ち、その地下には駐車場を有し、加えてガラ



スを用いた拝殿(隈研吾設計)と、その斬新さに戸惑いを覚えた。拝殿の左手は視界が開け、展望テラスになっている。見晴らしもよく、眼前に広がる眺望におのずと心も晴れ晴れに。さぞ夜景もきれいだろう。さらに打ち水された路地奥のレストラン「ル・ブルターニュ」や、別の横丁にある東京理科大学神楽坂キャンパス、泉鏡花旧居跡、北原白秋旧居跡のあたりを巡った。そして、再びにぎわう通りをぶらぶらと下り、牛

込見附へと至る。江戸時代の外堀の石垣の端正さには惚れ惚れとする。さらに、後日、このあたりに与謝野晶子が関東大震災の際に避難して夜を過ごしたと聞いて、一層、この地と晶子本人への思いを深くした。晶子が被災体験を詩や歌に多く残していることも初めて知った。一首挙げておく。「誰見ても親はらからのここちすれ地震をさまりて朝に至れば」

橋を渡り、中央線を見下ろしつつ、お堀端の桜並木の遊歩道を進み、その先の法政大学市ヶ谷キャンパスに寄り、高層タワーからの眺めを楽しむ。夕焼け色に染まっていく空が美しい。1階の休憩コーナーで小休止後、小雨が落ち始めたなかをJR市ヶ谷駅と急いだ。はたして今日の歩数はいかばかりに。今日の小さな発見は、明日へとつらなっていた。



くにたちブッククラブ文学散歩 2023

早稲田、神楽坂を巡る に参加して

中島千恵子

公民館の講座に出席した折、文学散歩の企画を知りました。なんと!紅野先生夫妻のお店でランチの予定が入っているではありませんか。

当日は他の用事がある為、途中で帰るお許しを頂いてすぐに参加申し込みをしました。

当日(10月21日)は国立駅に14名の方が集合。良く知らない方々とも道中楽しく早稲田駅に着きました。

まず早稲田大学の會津八一記念博物館へ、次に演劇博物館、これは古い木造の風情のある歩くと軋む建物なのに妙に新しいエレベーターが便利です。小部屋の映画上映や外国の古い劇場の模型、能装束等之、時間が足りないので再度ゆっくり来たいと思いました。

村上春樹ライブラリーのきれいなトイレでトイレ休憩をとっていよいよ目的のランチ「ごはん屋たまり」です。

残念ながら全員分の席がなく数名の方は他店でのランチになりました。「ごはん屋たまり」は少さいけれど、おしゃれな居心地の良いお店でした(お店のメンバーもミリオク的で)。生きの良い板前さんがすんごく!素材に拘った!美味しい料理を出してくれました。



先生は文学講座でも私達の発言を丁寧に聞いて一人一人を受けとめて下さるやさしい先生だったと憶えています。お店でにこやかに接客して下さる先生もステキでした。友人に写真を見せたら「イケオジ、だね」と今はそういうのかと新知識でした。

金井先生手作りの小皿のキンピラ?や変わったポテトサラダも美味しかったです。楽し

い時間はアッという間に過ぎ、皆で記念写真をとってお店とお別れしました。



その後はまだまだ興味深い瀬石山房記念館から神楽坂散策(赤城神社・毘沙門天)へと企画が続きますが私は同行できず思い出はここまでになりました。

実たくさんの楽しい企画をお世話下さった担当の方には本当にありがとうございました。

以上

私たちの社会や経済は難しい問題に囲まれています。私の住む町にとどまらず、日本や世界においても貧困と格差、環境と資源、人間・労働疎外の三つの問題群に囲まれて手をこまねいている状態です。しかし、田中さんは世界が持続可能で、人々が豊かに暮らしていけるものにするためには、どのような技術を開発・選択・普及させていけばいいか、またそれを含めた、望ましい未来社会の全体的枠組みを目指すことは現実の困難を切り開いていく有力な方法ではないかと思考を進めます。哲学や倫理、思想について深く考えるところにも、現在の社会や経済に大きく影響を与える科学技術を適正技術の観点から見直していく、困難ではあるけれど前に向けて進んでいく行動倫理を示していると期待をもちました。

田中直書『適正技術と代替社会―インドネシアでの実践から』(岩波新書)、『現代適正技術論序説―近代科学技術に代わる技術体系をめぐって』(社会評論社) ほか



ブッククラブから

藤野可織 著 『ドレス』 を読んで

中島三恵子

朝のポストに公民館だよりがあった。私が楽しみにしている広報だ。そろそろブッククラブのお知らせが……見つけた。テーマは「記憶の欠片をひろい集めて」、そして一人ひとりに違った景色が見えてくると書かれていた。魅力的な言葉だ。これはどう読んでも、どう感じても OK ということか。浅読みの本領発揮で早速作品の『ドレス』を手に入れる。まずこの薄さは好みだ。短編なのも嬉しい限り。読み始めは、一見シンプルな日常が、あれよあれよと思う間におかしな世界に入っていく。主人公の彼女、右りの右耳にある鉄のイヤリング(そう、私も昔イヤ大昔に同じ様なイヤリングをしてた、しかしそこで止まったが。ここまではだんだん大きくなり両耳全体を鉄がおおうようになる(彼は何故るりを止めないのか、尊重?嫌われたくないから?それとも愛ですか?何れにしても二人の間に理解する為の言葉がないのがもどかしい)。

最後には全身鉄(甲冑)で覆われて彼の前に現れるのだ。もう笑うしかない! ピント外れは承知の上で私は些細な部分が気になった。短編「デキサス、オクラハマ」は生肉色のパーカー、こんなパーカーが売り場にあつたら趣味悪(わる)しかなと思えん。主人公の恋人、圭はこのパーカーを残してドローンに消される、何故。

短編「マイ・ハート・イズ・ユアーズ」は最初の四行、今流行のアイドルあるあるだ、すぐ頭に浮かぶ、これが核となつてこの物語は出来たのではと思つた。

私はこの作品はチョットした日常から妄想をふくらませ、人間の矛盾をブラックユーモアで表したのか?と思つた。

サテ、山岸先生はこの作品をどの様な景色で見せてくださるか楽しみに出掛けた。先生は参加者の感想を交ぜながら丁寧に話してくださつたのだが、私は各々の作品に興味がありすぎて頭からすり抜け多し、どうにか残る幾つかの事はやはりメッセーj性の強い作品であると言う事、私にとっては固定観念からの脱却が必要だった。

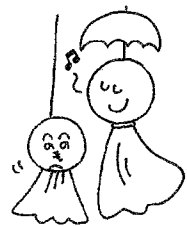
藤野可織の作品では、全てを平等に扱う。天は人の上に人を……なんて言つて場合じゃない!人間と犬は勿論、ドローンだろうが骨格標本だろうが何もかも、男と女の性差も超えて、男性優位など昔話になっている。イヤ人間そのものが優位ではいられないのだ。人間が持つ観念(無意識的加害性)を含め物差しはすつぱり切り捨てられる。

そこは、言葉を尽くしても分かりえない世界、何ものかにとられない世界なのだ。

少し言い方が雑になるが、全ての物、事がパーツとなつて再構築される、そこに新しい何かが見えてくる。生肉色のパーカーは悪趣味とかアイドルとかそんな話ではなかった。当然生肉は身体のパーツ(物化)でありアイドルは男性優位社会の反転現象だった。

しかし私は楽しく読んだ。一人ひとりが違つた景色で良いと言うことでお許しください!

(河出文庫)

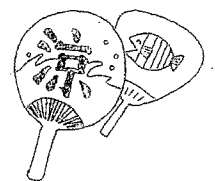


ブッククラブから



山田詠美著『ファーストクラッシュ』に参加して

岩井としえ



この日の感想を書かなきゃと追われる日々の中、今回の資料の中から「レジ打ちの普通のおばさんにある心打ち砕かれる恋を描きたい」という山田詠美のことばが飛び込んできた。ええー!? 確かにこの作品の第一部の主人公・咲也は、今はスーパールのレジ打ちをやっている。第一部の中ではこの人が、三人姉妹の真ん中で、姉や妹に比べて、私が一番見えている、わかっているんだ、と語っている。ところが、彼女は学生時代の国語の授業中に居眠りしている時、島崎藤村の『初恋』という詩の、

「やさしく白き手をのべて 林檎をわれに与えしは 薄紅の秋に実に 人こい初めし はじめなり」というフレーズを聞いたとき、次のような感情に襲われる。「詩の言葉は、あの時の情景と連動して、私の脆い部分をはしから襲って行く。そして、その粉々になった欠片は、私から離れるそばから氷が溶けるように雪に変わり、涙となってはらはらと落ちる。」レジ打ちの日々からは、連想できない過去と言えるのでは。咲也の回想に「つまり、私は耳年増で頭でつかちなだけの少女だったのだが(中略) 新堂力がやって来て、私の頭の中で渦巻いていたファンタジーを現実が侵食して行ったのだった。そこには言葉だけでは形に出来ないものが存在していた。(中略) 心と体の要素のどちらかが大きくなり過ぎた時に訪れるとまどい、そして、それがびたりと重なった幸せな混乱。どちらの時にも、私は、言葉をお忘れした。そして、男との関係が軋むと、言葉の大切さを思い出す。すると、

それまで言葉にならなかったものは、言葉によって思い出にされるのだ。」とある。これは、かなりの自意識と言えるのでは(普通のおばさんの過去にしては)。三姉妹は、それぞれ自意識のもとに自分なりの位置を獲得している。それって、『プライドと偏見』(ジェイン・オースティン)の五人姉妹の話に似ている。

この課題本は、読みやすく、さらりと読んでしまった。かなり裕福な三人姉妹の五人家族。年配のお手伝いさんもいる。そこに、父親が自分の亡くなった愛人が残した男の子(自分の子ではない)を引き取ってからの話。しかも、年は、二つ違いの長女と次女の間。参加者の方が、この小説の、類似というので、『嵐が丘』を挙げていた。

第二部は、長女が主人公。おかあさまと、似ていると周りから言われているが、「母のように男(父ですけどね)に振り回されてズタボロになるようなことは絶対ない。もっと気高い存在の筈」と、常に意識していた。しかし、「何故? いっただい、どうして、自分の夫の愛人だった女の子供に普通に話しかけられるの? 私は、その時、それが母の精一杯のプライドのありようだと思ひ至ることなど出来ませんでした」と、回想する。さらりと読んでしまった私は、今回、書くことを引き受けなければ、これらの文章に気づけなかった。かなり試行錯誤し、時が過ぎたからこそ、到達できた長女・薫子の成長と言えるのでは。おかあさまと似てないと言ってくれた力は、「あんたのおかあさま? の方が、ずうーっと面倒臭い。で、その分、

ばり綺麗や」と言った。その母の面倒くさい精一杯のプライドに、時間を掛けて気づけたのだ。ここに出てくる詩は、中原中也の『春日狂想』。

第三部は、末の妹薫子が語る。ここに出てくる詩は、寺山修司の『かくれんぼ』。

「かくれんぼは 悲しいあそびです (中略) もういいかい? と呼びかけながら しずかに老いてゆくでしょう」この詩が、出てくるのは、お母様と力とのやりとりの中。薫子はちよつと離れたところから、聞いているだけ。姉たちが、ファーストクラッシュ(初恋)に碎けて、過ぎて行つたのに、大人になった今もまだ抱えたまま。講師の榎本先生が、姉妹が主人公の小説をいくつか挙げた中に、『若草物語』があつたが、そこでは、末の妹エイミーが隣人ローリーと結婚した。さて、本作品では、薫子の力への思いが成就するかも? というところで終わっている。これ、ハッピーエンド? ずうつとずうつと、抱えたまま引き摺っているのでは? この作品を読んで、かなり裕福な四人家族の所に、一人の男がやってきて、一人一人今までの暮らしを狂わせてしまうという、パゾリーニの『テオレマ』を思い出した。前から山田詠美を読んでいた方には、物足りない等、言われていたが、今回初私の私には、読む度に、色々な映画、小説、芝居等々思い浮かび、かなり楽しんだ。このブッククラブで、出会えてよかった。

(文春文庫)

ブッククラブから

佐藤泰志著

『きみの鳥はうたえる』

―逃げた先の人生―

東健太郎



1. 『きみの鳥はうたえる』について

約40年前の国立市を舞台にした作品です。21歳の僕、佐知子、静雄の男女3人の、貧乏な中での享樂的な青春と暴力を描いています。一見、一つの傘に三人入るという「三人傘」に象徴されるような、三角関係ではない男女の関係を軽やかに描いているようにも見えます。ところが、ラストでトーンが大きく変わり、小説は衝撃的な結末を迎えるのです。

最初の感想は、ふわふわした生活から急に現実が突きつけられるんだな、刑事事件を起こしてしまうのは中上健次の『枯木灘』みたいな、というものでした。

読書サイトで他の感想を読むと、あのラストの事件は知らないのではと言う意見が目を惹き、芥川賞選評で丸谷才一も、「ただおしまひのはうは感心しない。人殺しなんか入れなくたっていいのに。佐藤さんは小説的な恰好をつけようとして、かへって話のこしらへを荒っぽくしてしまつた。」と言っていたし、映画でもあの結末はカットされていたので、影響されてしまい、ブッククラブの発表でもあの結末はない方がよい、と主張しました。なお、他の参加者の意見は賛否相半ばでした。

この点について、大木志門講師の解説は意外な視点からのものでした。静雄は母親の問題から逃げ続けていたため、ああいう事件を引き起こした、いわば自業自得だということです。確かに、同居している母を見捨てて家を出、働きもせず周囲に金を借りまくって享樂的な生活を送っている静雄が、母のことを語ったとしても心底心配しているとは思えません。とすると、本作は若者の享樂的な生き方を一見肯定的に捉えているようでありながら、実は倫理面から批判的に見ていると言えるでしょう。まさに目から鱗の解釈であり、あの結末は必然だったのだと深く納得しました。優れた知見に触れて、自分のそれまでの見方が音を立てて崩れ落ちる瞬間が私は好きです。

2. 他の小説および評伝について

他に2作読みました。1作目は短編集『大きなハードルと小さなハードル』。その中では自分の家族を描いた秀雄ものが素晴らしいです。頑固で気まぐれな秀雄と、翻弄される妻の光恵、娘の陽子が人生の時々に出くわす情景を秀逸なタッチで描き出し、味わいが深いです。

次に遺作となつた『海炭市叙景』。架空の街、海炭市

に生きる14歳の少年から70歳の女性まで、いろんな人物が遭遇する人生の一断面と哀歓が描かれます。登場人物は佐藤の分身から離れることができ、自由度が増し、より世界が広がったと思います。佐藤泰志の最高傑作でしょう。一作読むならこれです。

『狂伝 佐藤泰志 無垢と修羅』というハードカバー607Pの評伝を読みました。これは佐藤愛溢れる元毎日新聞記者中澤雄大氏が、地道に関係者へのインタビューを重ねて出来上がったもので、今後佐藤泰志研究をする際の第1級の資料になると思います。

ここで浮かび上がってくるのは佐藤の一刻さと無頼ぶりが、結婚しているのに、自分の周囲に魅力的な女性がいると、かまわず手を出そうとする。修羅場の連続で妻の喜美子さんはどれだけ苦労したことか。家では常に緊張を強いられていたので、佐藤が亡くなって妻、子どもともにホッとしたそうです。今再注目されて、「死んで花実が咲いた」と妻の喜美子さんは思っているそうですが、死んでからでもいい夫になったのなら良かったですね。

(河出文庫)

ブッククラブから

川越宗一 著 『熱源』 を読んで

北川みどり

小説を読む機会がやっとでき、くにたちブッククラブを知り、自分では手に取ることがあまり無い本が読めること、そして同じ本を読んだ方々の感想を聞きたくてブッククラブに参加しました。

文学賞には興味がなく、川越宗一は全く知らない作家でした。

『熱源』を手にしてずいぶん厚い本だ。最後まで読めるかなというのが最初の印象です。馴染みのない名前「ヤヨマネクフ」「シシラトカ」「キサラスイ」などに戸惑いながらも読み進めるうちに作品に徐々に引き込まれました。物語の展開が気になって睡眠時間を削ることになり、これはいかんと読むペースを落としました。

これを史実フィクションとも言おうのか……。場所は樺太、北海道、サハリン、ロシア、ポーランド、東京、南極など広範囲に広がり、時代や社会情勢もどんどん変化します。和人による先住の人達への差別や侵略や感染症の蔓延など残酷な事が次々とおこります。侵略は現実世界で続いている深い問題で辛くなります。

そんな中でも人としてのお互いの交流や共感も生ま

れています。過酷な中で唯一の希望でありホッとする部分です。実際にもあったのではないか、ぜひそうであって欲しいと願いました。

最後まで一気に読みましたが少し残念に思ったことが2点あります。

内容があまりにも盛りだくさんで読み手の関心が散漫になってしまうこと、女性の描き方が少ないことです。ブッククラブの参加者にも同意見の方がいらっしやいました。女性についての歴史資料が少ないからこそ想像で作者に書いて欲しかった。作品の中では大変な状況の中で自分の意志決定をした強い女性が出てきます。そうではなかった女性についてももう少し具体的に書かれていたらもっと良かったのではないかと感じました。

講師の内藤千珠子先生には『アイヌ』をめぐる物語の暴力―川越宗一『熱源』とレイシズムの現在』をテーマにタイムリーな解説をしていただきました。小説によって「人種差別をめぐる現代からの読解をしよう」と試みている先生のような文学小説の研究者がいることを知りました。面白い面白いと読んでいてすっかり忘れていた小説の読み方の観点です。うすう

すは感じていた点を社会的に広げて考える事ができました。差別や学問の暴力に気付きにくくなっている現代には重要なことと思います。また、『熱源』はそうした社会問題にも目を開かせる小説であると再確認しました。

作者の調査力、想像力、創造力に圧倒されました。作者の次の著書『パシオン』もぜひ、今度はゆっくりと読んでみようと思っています。

(文春文庫)

くにたちブッククラブ

―記憶の欠片をひろい集めて―

今村夏子

『むらさきのスカートの女』

(朝日文庫)

講師 佐藤 泉

(青山学院大学・日本近代文学)

と き 11月9日 (木)

夜7時半～9時半

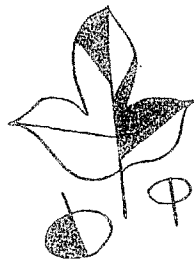
ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は12月14日 (木)

安部公房『箱男』

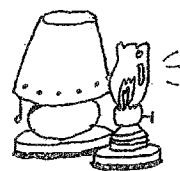
(新潮文庫) です。



ブッククラブから

村上春樹著 『女のいない男たち』に参加して

小嶋 操



今回初めて参加しました。課題図書が村上春樹だったからです。

私はずっと村上春樹を読んできましたが、読後感を話し合える友人は誰もいませんでした。そのため、出席者の皆さんのお話しをとても楽しみにしていました。

今回の作品は短編集です。なんらかの理由で女性に去られた男性の話 6 編です。

まず最初に皆さんの読後感

「なぜ妻が出て行っただけで会社を辞めるのか?」

「いったいこの女性はこれだけの理由で出て行ったり命を絶つたりするのか?」など登場人物に関する疑問が出る一方、「村上春樹は関心がなかったので今回初めて読みました。けれど続かなくて途中でやめた」等の感想が出て、面白かったです。その理由も聞きたいところでした。

主に登場人物の心や行動に関して、共感するというよりもなぜこうなるのか?といった疑問が多く出ました。

次に講師の話

この短編集は、前書きにもあるように「コンセプトアルバム」である。

様々な理由で、女性に去られた、または、女性を失った男たちというコンセプトで収録されている 6 編を、2

話一組として読むことが出来る。

登場する女性たちは皆、夫や恋人以外の男性との関係によって去って行く。

「なぜ、彼女達は去らねばならなかったのか」については、いつまでも答えはない。男達は理解できないし、納得いかない。

つまり、他に男がいようがいまいが「なぜ、出て行くんのだ。なぜだ」という疑問がいつまでも男を苦しめ、心は虚ろになって行く。

大切にしているものが、ある日突然大きな暴力的な力によってガラガラと崩れて行く。自分の意志に関係なく巻き込まれて行く(数々の災害、病気、事故等)。

心が虚ろになり、暴力に対する怒りもなかったこととして自分が傷ついていることさえ意識できなくなっている。

ここからどのようにして回復して行くのか、自分を取り戻して行くのか?

主人公達は、まず女に去られたという自らの過去を見据え、受け入れ、抑えられていた怒りに気付き受け入れる。

自分はこのなにも深く傷つき、怒り、孤独の内に自分を失っていたのか?嬉しくもない過去にひとり向き合

い、受け入れて今に至る。ひとつの物語を紡いで行く。今の自分との折り合いをつけて行く。自分自身を現実と繋ぎ止めて行く。傷つくべき時に充分に傷つかなかったと気づいて行く。

これを、現実に私達がやるとしたら苦しいです。出来ないことかもしれない。だから、物語の力を貸して欲しい。私達はこのように物語を欲しているとも言えます。村上春樹の物語はこういう話が多くあります。

講師の話を聞いた後

講師の話の後、もう少し出席者同士の話し合いがあれば面白いと思います。また、今回の参加者の方々は自分のいつもの本読みと違って、なんらかのアウトプットを前提とした読者でした。細部まで注意して読み、読後感を自分自身の言葉にまとめるという時間は刺激的なものでした。こういう本読みは時々必要だと実感します。

また、フェミニズムの観点から、村上春樹の女性像は 70 過ぎのおじさんの固定概念とのお話がありました。こういう物言いこそ人を年齢と性別で括る固定概念そのもののじゃないのかなあと感じます。

最後に、喪失からの回復というテーマであるならば、なぜ「男と女」という切り口で描かれたのか? 考えて行きたいです。

(文春文庫)

ブッククラブから

今村夏子『むらさきのスカートの女』―補色関係―

大山 葉子

タイトルの『むらさきのスカートの女』が何故むらさきなのか、誰もが思う事だろう。紫ではなくむらさき、と平仮名である事はさておき、赤や青のように、むらさき色は性別に関係しない色なので、男女のどちらでもあり得ると考える事も出来る。スカートは女性性の記号だが、そこにはむらさき色でなければならない理由が、何かある筈である。

しかし、この小説の語り手は黄色いカーディガンの女で、彼女の目を通してむらさきのスカートの女の日常が語られる。この語り手は、何故かやたらとこのむらさきのスカートの女と友達になりたがっており、策を弄するも失敗。経済的に破綻をきたし、万が一に備え夜逃げの準備までしている。だが、不思議と悲壮感も惨めさもなく、むしろ冷徹である。とは言え人の事に構っている場合ではないと思うのだが、失業中のむらさきの女を、自身の職場であるホテルの清掃業に就職させる。かと言って友達になるわけでもなく、ただひたすらむらさきのスカートの女の一举一動を観察し、探偵の如く後までつける。だが、むらさきのスカートの女の方は、一向に気が付かないのが不思議である。

しているらしい事が判明。犯人捜しが始まるあたりは、探偵小説の趣き。むらさきのスカートの女が疑われ、自宅アパート二階の玄関先で職場の所長に自供を迫られ押し合いとなり、廊下の錆びた手すりにぶつかった所長が地面に転落。何故かそこへ黄色いカーディガンの女が登場。所長の死を告げ、むらさきのスカートの女に逃亡の手順や潜伏先を指示。ここで私の頭の中ではてなマークが飛び交い、ふと我に返る。この話の全ては、黄色いカーディガンの女が創り出した一種の妄想なのでは、と。ブッククラブ当日、参加者の一人も言及されていたが、黄色いカーディガンの女は「信頼出来ない語り手」なのではないか。

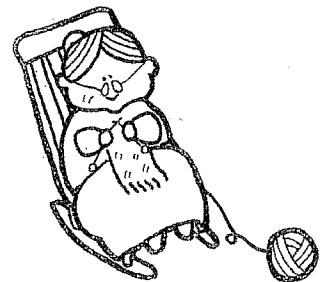
結局、むらさきのスカートの女は何処かに消え失せてしまい、死んだ筈の所長は骨折こそすれ無事。大体、錆びた手すりがそう簡単に折れるとは思えないし、もし折れたなら何か細工がしてあったに違いないのだ。またホテル備品の横流しは黄色いカーディガンの女の仕業である様な事が、最初の方で伏線として語られていて、推理小説の様に巧みだ。

黄色いカーディガンの女である語り手は、むらさきのスカートの女の存在を妄想する事で精神のバランス

を保って来れたのだろう。むらさきと黄色が補色で、互いに引き立て合う色である事に、2 人の関係が表され象徴されていると思う。むらさき色は古今東西、特別な意味を持つ色でもあった。

余談だが、私もホテルで働いた経験があるのだが、この小説の中での様な事は一切なく、スタッフは皆、真面目で気持ちの良い人達であった事を記しておきたい。

(朝日文庫)



くにたちブッククラブ

―記憶の欠片をひろい集めて―

小川洋子『約束された移動』
(河出文庫)

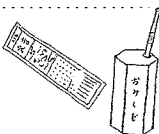
講師 おだいら まいこ
小平 麻衣子
(慶應義塾大学・日本近代文学)

とき 1月18日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎(572)5141

*今年度のブッククラブは
今回が最終回です。
*当初と日程、部屋を
変更しています。

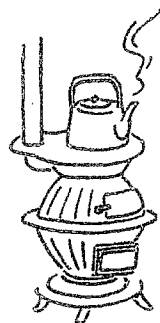


ブッククラブから

安部公房 著 『箱男』

〜半世紀の時を隔てて〜

矢野 勝巳



『箱男』を半世紀ぶりに再読しました。70年代前半の高校時代、安部公房は大江健三郎と並んで文学好きの多くの生徒が読んでいた現代の純文学作家でした。ホッと大江とクールな安部の作品は思春期の心に深く留まったように思います。ただし、安部の小説は、エッセイ集や戯曲集は出版されていたものの、長く発表されていませんでした。

その頃、高校の文化祭において安部公房の講演を聴きました。当時、テレビでも作家が話す機会はほとんどなく、有名作家が目の前でしかも毎日通う学校の講堂で話されていることにたいへん感激しました。

そして卒業時期である1973年3月に待望の新作『箱男』が発表され、すぐに購入しました。箱のなかで生活しそこ

から外を覗くというシュールな物語はその時、高校一年の夏休みに読みふけた同じく安部の『他人の顔』の系譜であるように感じました。

また、この本は、あくまで小遣いですが、自分で購入したはじめての新潮社純文学書き下ろしシリーズです。函入りで本には紙カバーの上にさらにビニールカバーまで掛けられています。また、安部公房自身が記した「書齋にたずねて」と題する投げ込み付録が付いていました。

付録では、満洲で17歳まで育つたために、国定教科書では「自分たちの住んでいるところは山紫水明で、春になれば桜の花が咲いてと習うわけだけれど、現実の周囲は見渡す限り何の突起物もない荒野なんだ」とその違和感が記されています。そこから、「常に現実を相対化し

て見るという習慣がそうした生活を通して植えつけられた」と述べられています。安部が亡くなって30年経ちますが、ほとんどの小説は今でも文庫として刊行されている稀有な作家です。それほど作品には現代性がありますが、現在の作家には書けない要素があり、その理由の一端は満洲経験にあるのかもしれない。

付録ではまた、人間の歴史は国家を除き組織への帰属をやらざる方向に進んできたとし、「しかしいま、その最終的な国家への帰属自身が問われ始めている」と書かれています。そして、『箱男』では、それを極限まで追いつめてみたらどうなるかということを試みてみた」と記されています。

この安部の言説に呼応する作品の中の箱男の捉え方が、講師の方と私は正反

対だったのが興味深かったです。また、参加者からは安部公房作品を全部読んだというファンの方からもっとも合わない作品のひとつという方までいました。好き嫌いがはつきり分かれる作品でした。さらに若い世代の方からは、高校の課題図書で読んだという話も伺いました。箱男はオタクやストーカーの要素もあり、その後の都市化の負の側面を先取りしてもいます。また、講師の方の見える関係や征服するされる関係などの説明は、時代を越えた作品の普遍性を示しています。

読んで楽しくないし、励まされないし、よく分からないけれども、奇妙な熱気のある忘れ難い不思議な傑作です。

(文春文庫)

ブッククラブから

小川洋子 著 『約束された移動』 を読んで

庄司 沙絵

表題作を含め 6 つの短編からなる小川洋子の本作を読み終わった後、私のなかに相反する奇妙な感覚が同居していた。

一つは心がしんと静かに落ち着いている感じ。目の前には問題が山積みだけれど、ひとまず今日は安心して眠っているんだよ、と言われたような感覚である。もう一つは、心がざわついて落ち着かない感じ。得体の知れない怖さにうっすらと覆われ、いくら大丈夫だと言いつけてもゾワゾワした感覚から逃れられないのだ。なぜだろう？

6 つの短編に共通する要素といえば、主要な登場人物が何らかの仕事を持ち(あるいはかつて持っていて)、助けを必要とする人にさりげなく手をさしのべ、相手を安心へと導くことに注力していることがあげられるだろう。描かれた職業は、ホテルの客室係、病院の案内係、デ

パートの警備室の迷子係、託児所の園長、希少語の通訳などである。「寄生」という作品の主人公が巻き込まれるのは仕事ではないけれど、見ず知らずの老婆に「迷惑行為」を受けながらも、結局は老婆が施設に帰るのを見届けるという役割だ。

コロナ禍でケア労働が注目されたが、子どもや高齢者やしょうがい者をケアする労働現場はもとより、どんな立場であれ、目の前にいる人間の望むかたちを慮って行動することが、本来ケアと言われる領域なのだというに気づく。「ケアラー」たちの働きによって、子どもは安心して本の世界に耽ったり、思う存分涙で顔を濡らしたり、大人の首に巻きついたり膝によじ登ったりして戯れる。登場人物たちの子どもへの関わりから、自分も無垢な部分を守られているような感覚に浸ることで、最初の読後感がもたら

されたのかも知れない。

しかしながら、登場人物たちの行動には、どこか常軌を逸しているようなところもあるのだ。

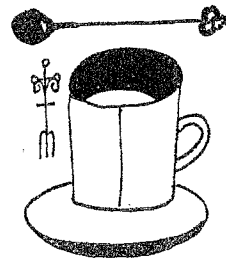
例えば、ホテルの客室係は宿泊客だったハリウッド俳優が抜き取った本を何度も読み、彼の出演作の同じ場面を何度も観続ける。病院の案内係はダイアナ妃が着たドレスの再現に没頭し、それを身につけて街のショッピングモールにくり出す。託児所の園長は子どもたちにお話をせがまると、黒子羊の死に方を繰り返して聞かせる。

想像するに、あらゆる人々に心を砕いてきた人たち自身は、人生のどこかで負った傷を誰からもケアされないまま、孤独に歳を重ねてきたのだろう。何かに没頭したり、異常な執着やこだわりを持つたりすることが自己治療として機能

していて、それが読み手にも小さな棘として突き刺さってしまうのではないかな。

講師の小平麻衣子先生は、ある場面を取り上げて、託児所の園長は子どもが大人になっていくことを「成長」ではなく、「死」と捉えているのではないかと、いう解釈をされていた。ここでいう死とは、幼児性が失われることを指しているのだろう。子どもたちの無垢な部分を、自分のためだけにいつまでも凍結してしまいたいという、アディクション(依存症)のような欲望。もしかしたら、登場人物たちは献身的な閉じた世界を作り上げることで、自分自身を癒す手段にしていたのでは、と思えてくる。怖さの正体は、思った以上に闇が深いようだ。

(河出文庫)



2023年度を振り返って

公民館

2020年から続くコロナによる制限や対策も、5月に感染症法上の「5類感染症」へ移行したことに伴い、世の中も直接集まったり、会食をしたりということがしやすいくらいになりました。

ブッククラブでも、文学散歩がお昼を挟んで1日できるようにになったり、12月には、コロナ前には実施していた忘年会の代わりに、講師との懇談会も開催することができました（講座前の30分程でしたが）。

また、今年度は振り返り会や作品選定会、その後の文集作りにおいても、活発に議論が交わされ、参加者の皆さんのブッククラブへの真剣な思いをより一層感じることができました。話し合いでは、外国文学を課題作品の中に入れるかどうかといった作品選定について、参加者の感想や講師のお話、質疑応答の時間といった講座の構成について、参加者を増やす工夫について、文集作成

の意義について等々、ブッククラブに関わる様々な課題を、参加者の皆さんとじっくり討論できました。それぞれが、自分がこれまで参加してきた中で感じてきたことを忌憚なく話し、他の人の意見にもしっかりと耳を傾け、意見を交わし合うことで考えを認め合い、現段階の着地点を導き出すことができました。顔を突き合わせて話すことで生み出されるものの大切さを感じる時間でした。

参加してくださった方々が文学、そしてブッククラブという場が純粹に好きだからこそ、このような対話ができるのだと思います。そして、様々な作品を読み、他者の感想や講師の解説を聴いてきた皆さんだからこそ、話し合いという民主的な方法によって結論を出せるのだと実感し、皆さんを改めて尊敬するとともに、人と人との関わりの大切さ、ありがたさを感じた1年となりました。

あとがき —知る喜びとブッククラブ—

このブッククラブに参加して3年が経ちました。毎回（24回連続）出席して、徐々に慣れてきたかな、という感じです。

当クラブは、カルチャーセンターなどと違い費用がからない上に第一線の研究者の解説が聞ける、という点が非常に大きな魅力となっています。

47年の伝統があるというのも驚きで、課題作品選定に至る手続きも民主的であり、読書会当日の進行ルールもよく考えられていて、これまでの経験が生かされているのだろうと思いました。

いつも当日の1週間前から集中モードに入り、課題図書及び関連書籍を読み込み、インターネットなどを通して情報収集しつつ感想を練り上げていくのですが、この作業が何より楽しいです。まさに至福の時と言えます。

そして、会当日は1週間の成果を数分間に凝縮した形

で発表するのですが、今やこれが生きがいとなっていますので、より一層注目していただけると嬉しいです。また、他の会員の方の感想や講師の解説を聞いて新たな視点に気づくことも多く、まさに知る喜びを実感しています。

今、47年というブッククラブの歴史の中に私たちはいます。この歴史は、図書室利用者と公民館職員が、カウンター越しで本の読後感を語り合いと会話したことから始まったそうです。自治体の事業は横並びが多いですが、市民と担当者の会話から生まれたこの事業は、他に類例を見ない存在となつて今に至ります。利用者の要望をこのような形にしてくれ、そしてそれを継続発展させてくれた歴代の担当職員の方には感謝しかありません。

年齢も、性別も、これまで生きてきた背景も異なる人々が、同じ小説を読んで感想を述べ合うということは、この私たちが生きる世界においても稀な機会と言えるでしょう。職場でも、家庭でも、友人同士でも話題には出せないことが多いでしょうから。

この稀で楽しい機会を私たちだけで独占するのはもったいないとも言えます。もつと多くの人にこの喜びを味わってほしいです。近隣であれば、誰でも参加可能ですので、お気軽にどうぞ。

これまで、どれだけ多くの会員が、文学作品を通して生きることの意味や知る喜びを感じてきたことでしょうか。累計すれば数百人に及ぶでしょうか。そして、その声は過去の文集を開けば聞くことができるのです。最初の文集は「この一冊」というタイトルで、1985年に発行され、原稿は手書きでした。公民館図書室で創刊号以下数冊を読みましたが、まるでその会員が目の前にいて肉声を聞くかのごとくでした。文集を読む時、読み手と当時の会員は時空を超えて一緒に存在しているとも言えるでしょう。

今回も、今を生きる私たちの声を文集に刻むことができました。ぜひ、手に取ってその声を聞いていただければ嬉しいです。

文学講座連絡会文集編集委員会 東 健太郎



編集 文学講座連絡会 編集委員会

発行 国立市公民館 042(572)5141

2024年4月30日